

名古屋大学国際機構

## 国際言語センター

## 年報

第3号

## 目次

巻頭言 .....	福田 真人	1
実践報告		
・平成27年度公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」 .....	衣川 隆生	5
活動報告		
・FD 活動の報告 .....	靱山 洋介	9
・第72期（2015年4月期）日本語研修コース .....	衣川 隆生	11
・第73期（2015年10月期）日本語研修コース .....	衣川 隆生	13
・第34期 上級日本語特別コース（2014年10月～2015年9月） .....	靱山 洋介	15
・全学向日本語プログラム 2015年度 .....	李 澤熊	18
・学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」 .....	浮葉 正親	23
・短期留学生日本語プログラム 2015年度 .....	石崎 俊子	26
・第16期 日韓理工系学部予備教育コース .....	俵山 雄司	28
・日本語教育メディア・システムの開発 .....	石崎 俊子・佐藤 弘毅	30
・G30国際プログラム（学部）における日本語科目 .....	初鹿野阿れ・徳弘 康代	32
資料 .....		33

## 巻頭言

国際言語センター長

福 田 眞 人

言語政策は、国家の立ち位置、将来への志向が如実に反映される。

アメリカはアメリカ文化センター、英国はブリティッシュ・カウンシル、フランスはアリアンス・フランセーズ、ドイツはゲーテ・インスティテュート、中国は孔子学院が、各々の文化・言語政策を宣伝し、流布しているのであろう。

翻って世界の言語勢力はどうか。今日英語が、あたかも世界語のように使用され、発信されているが、実際の言語勢力を見ると、まだまだ英語の占める割合は低い。

ものの本によって数字は異なるが、中国語人口が第一位（約13億人）で、次いで英語が母語話者数が5億少々。第三位がヒンディー語で5億を少し欠ける位。以下、スペイン語、アラビア語、ベンガル語、ポルトガル語、ロシア語、そして日本語、ドイツ語、フランス語と来る。

言語帝国主義になる必要は皆無だが、かつて世界一だと豪語していた機械工学だけは、日本語で論文が世界に通用した時代がある。今日の理系で、英語で論文を書かなければ世界で見てももらえないというのは隔世の感がある。（かつて革命前のロシア宮廷では、フランス語が公用語であったということも思い出される。

英国の近世ではイタリア崇拜熱が強く、貴族の子弟は物見遊山の旅グランド・ツアーに出かけて行った、ということも。）

しかし、日本の言語があり、日本の文化がある限り、日本語教育の重要性は変わらない。連綿と教え伝えなければならぬものがある。

しかし、世界には2796言語あるとする人もいれば、5600言語あるという人もいる。インド一国をとっても、公用語が15も紙幣に印刷されているが、実際には30の異なる言語、2000の方言が存在するという。私がインドに住んでいた時、2km離れた村の言葉が互いに通じないということを知って驚いていたが、それが方言のためなのか、はたまた生活習慣の違いによるものなのか、なお根強いカースト制度のせいなのか、判然とはしなかった。

日本でも、日本語もあれば、韓国・朝鮮語もある、中国語もある、アイヌ語もある、それに近年は英語、ポルトガル語が幅を効かせている。

さて、内に外に、日本語をどのように教え広めて行くのか、多文化主義同様に多言語主義を取るのか、今後の課題であろう。



# 実践報告

---



# 平成27年度公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」

衣 川 隆 生

## 1. はじめに

国際教育交流本部国際言語センターでは、平成25年、26年に引き続き日本語学習支援ボランティア組織「さくらの会」との共催で公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」を開講した。「さくらの会」は、旧留学生センター教員が講師を担当した名古屋市生涯学習センター主催2003年度日本語ボランティア入門講座修了生を中心として2004年4月から活動を開始した日本語学習支援ボランティア組織であり、「日本語で話そう」を合い言葉に現在国際言語センターを中心として週2回活動を行っている。

この講座は、一人でも多くの地域の方に留学生の日本語学習支援に関心をもってもらいたいと考え企画、開催されたものである。

## 2. 講座の概要

講座は11月2日、9日、16日、30日の月曜日に4回実施された。時間などは次ページのチラシを参照されたい。以下、概要を紹介する。

### 第1回「大学と地域の国際化」

- 1) 「留学生30万人計画」「グローバル30」「スーパーグローバル大学創成支援」など、現在文部科学省が進めている日本の大学の国際化施策について
- 2) 名古屋大学の国際化プラン、留学生数やその割合、出身地域などの現状と推移について
- 3) 留学生に求められる日本語とは  
「生活者として求められる日本語」「キャンパス日本語」「学術日本語」
- 4) 愛知県の外国人県民の現状・「あいち多文化共生推進プラン2013-2017」・「愛知県 多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方」について
- 5) 豊田市の外国人市民の現状、多文化共生施策、日本語学習支援について

### 第2回「日本語学習の支援ってどんなこと？」

- 1) 日本語教育と日本語学習支援の差について
- 2) 狭義の日本語教育と広義の日本語教育の差について
- 3) 狭義の日本語教育の限界について
- 4) 学習のプロセスについて

### 第3回「対話と協働を中心とした学習支援の方法」

- 1) 対話と協働とは？
- 2) 新たな能力観、習得観について
- 3) 対話型の活動体験

### 第4回「具体的な活動を知らう」

- 1) 対話型の活動体験
- 2) さくらの会の会員による活動紹介と対話

## 3. 受講者の状況とアンケート結果

コミュニティセンターなどにおけるチラシ配布、新聞広告を利用して受講者の募集を行ったところ20名の定員を越える申し込みがあったため、抽選を実施し24名の方に受講していただくこととした。何らかの形で外国人に対するボランティア活動をしている方も多かったが、ボランティア自体が初めてという参加者も3人に1人の割合であった。24名中21名が4回全てに出席し、2名が3回出席であった。また、終了時には20名からアンケートを回収することができた。


まずこの講座についてどこで知ったかについては「新聞広告」が11名で最も多く、次いで友人からの3名であった。昨年度から新聞広告を利用して広報活動を行っているが、その効果は非常に高いことがわかる。

「受講の目的、期待」については、「留学生との交流」「ボランティア」に興味があったから、という回答が多かったが、「日本語パートナー」という言葉から「テキストを使わず学習者の知っている言葉から日本語の学

習を深めていくとはどんなことなのか「授業形式ではなく留学生と交流しながら日本語をわかりやすく伝えるのはどうすればいいか」など、従来の日本語教育との差を知りたいという方も多かった。また「講座の内容が目的、期待に合ったものであったか」という質問に対しては「日本語を教えるというよりもパートナーになるという考え方が新鮮でした」「ボランティア講座の入り口として分かりやすかった」など「日本語パートナー」という言葉に興味を持って参加した方の期待に沿った内容であったようである。また、「実生活を教

材にすることは分かりやすかった」「教科書とは別にコミュニケーションを大切にしながら、活動していく大切さを知りました」のように、留学生と交流しながら日本語学習支援をする方法についても理解を深める内容が提供できたようである。一方で昨年同様「もう少し活動内容に踏み込んでほしい」「具体的な活動を見たい」など4回という回数の少なさから物足りなさを感じた受講者もいた。来年度以降は、これらの点にも考慮しながら講座のあり方を検討していきたい。

—平成27年度公開講座—  
さくらの会・名古屋大学国際教育交流本部国際言語センター共催

 **日本語学習支援を始めよう!!**  
**日本語パートナー講座**

さくらの会は2004年より名古屋大学の留学生とその家族の日本語学習を支援しています。日本語パートナーとして、「教える」という言葉にとらわれず、テキストは使わないけれど学習者の知っている「ことば」から「対話」へと広げていく、『日本語で話そう』を合言葉にボランティア活動をしています。

ボランティアとして何かをしたいと思っている方、  
日本語パートナーについて学んでみませんか。

**\* 講座内容と日程**

	日 程	内 容
第1回	11月2日(月)	大学と地域の国際化
第2回	11月9日(月)	日本語学習の支援ってどんなこと?
第3回	11月16日(月)	対話と協働を中心とした学習支援の方法
第4回	11月30日(水)	具体的な活動を知ろう

時間 15時00分 ~ 16時30分

場所 国際言語文化棟 203教室  
(地下鉄名城線 「名古屋大学駅」1番出入口)

講師 名古屋大学国際教育交流本部国際言語センター  
教授 衣川 隆生



\*昨年と同じ内容ですので、継続の方はご遠慮下さい。

# 活動報告

---

FD 活動の報告

第72期 (2015年4月期) 日本語研修コース

第73期 (2015年10月期) 日本語研修コース

第34期 上級日本語特別コース (2014年10月～2015年9月)

全学向日本語プログラム 2015年度

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

短期留学生日本語プログラム 2015年度

第16期 日韓理工系学部予備教育コース

日本語教育メディア・システムの開発

G30国際プログラム (学部) における日本語科目





## FD 活動の報告

糊 山 洋 介

日本語日本文化教育部門では、平成14年にFD班を設け、以後、現在に至るまで、日本語・入門講義の授業を担当する教員全員でFD活動に取り組んできた。さらに、平成16年には、留学生センターの委員会としてFD委員会を設置し、教員個々の教授能力の向上、授業の改善を目指している。

さて、今年度は、平成22年度に策定した下記の「平成23年度から27年度までのFD活動計画」に従い、FD活動を実施した。なお、平成25年度に改組があり、「国際言語センター」となったが、FD活動についてはこれに伴う変更はなく、計画通り行った。

### 平成23年度から27年度まで（5年間）のFD活動計画

毎年度、教育（特に授業）を改善するための「研修会」を開催する。

研修会の回数：各年度、2～4回程度。

研修会の形式など

講演者・発題者があるテーマについて話し、その後、質疑応答・ディスカッション。

火曜日の全体会の時間帯を当てる（1時間程度）。

講演者・発題者は、話の内容を、A4、1～2枚程度にまとめ、記録として残す。

5年計画の最終年度である今年度を実施した「FD研修会」の内容は下記の通りである。この研修会には、国際言語センターの専任教員および非常勤講師の大半が出席し、講演の後、活発な質疑応答・議論が行われた。

### FD研修会（講演者2名）

日時：2016年1月26日（火）午後3時～4時

場所：国際言語センター207E教室

#### (1)

講師：佐藤弘毅名古屋大学准教授

題目：電子黒板（またはプロジェクタと白板の組み合

わせ）を活用した授業の良さととは

内容：

ICTを活用した授業方法の工夫として「白板の上にプロジェクタで教科書等を投影して、そこに書き込みながら説明する」方法を提案した。この方法の良さは、特別な準備や技能が必要ないこと、従来から授業で伝統的に使われてきた白板（＝教室前面で共有すること）の利点を活かすことである。この利点として、以下の3点を挙げて詳説した。

(1) 速記性・柔軟性：すぐ書け、すぐ消せる。書きながら説明すると伝わりやすい。板面を広く使え、絵カード等を貼ることもできる。

(2) ノートテイキングの効果：板書したもの・板書した位置が要点である。ノート見直しによる発話も期待できる。

(3) 視線集中の効果：示した点が今説明している点であり伝わりやすい。受講者の意識が集中することにより一体感が生まれ、集中力や発話が促される。

また、応用編1として、この方法をより効果的に行うことができる装置である電子黒板を取り上げ、その機能を①操作、②書き込み、③保存の3点にまとめて紹介し、実機を用いたデモを行った。さらに応用編2として、白板に投影して使える電子教材を紹介した。

#### (2)

講師：俵山雄司名古屋大学准教授

題目：意見文における日本語学習者の接続詞の使用実態

内容：

接続詞は、談話中の文間・段落間の論理関係を示し、その適切な使用は読み手が文章内の情報を正確に理解することを促進するものである。今回の研修会では、日本語母語話者（JP）と台湾人日本語学習者（TM）の意見文をデータとして行った、書きことば（書記）談話における接続表現の使用傾向についての調査結果を

紹介した。

具体的には、調査結果から以下の2点についての分析結果を示し、併せて教育に関する提案も行った。

1) 「このように」は、JPが11例で、形式別の集計で7位に入っているのに対し、TMではわずか1例であった。「このように」は前件で述べられていることがらを後件で一般化して示したり、前件で述べられていることがらのエッセンスを抜き出して後件で示したりするはたらきを持つ。JPの意見文では、結論への下地を作ったり、論点を変えたりするために、そこまでの議論をまとめようとして使用されているものが多い。一方、TMには議論のまとめがない、もしくは特定の表現なしで、まとめを提示することが観察された。今後、教育現場では、従来さほど重要視されていなかった、そこまでの議論をまとめて短く提示する「このように」のような表現の扱いを

重くするべきではないか。

2) 「だから」は、TMが18例で、形式別の集計で5位に入っているのに対し、JPで1例も観察されなかった。このような結果となった理由には、意見文は、「だから」という形式が使いにくいジャンルであること、JPはその他の手段（「のだ」文や名詞「理由」の使用）で「理由－意見」や「原因－帰結」の関係を表示していることの2点が挙げられる。実際に指導する際には、「のだ」文により「理由－意見」の順を変えること以外に、名詞「理由」の使用によって談話のつながりを示していくことも考えなければならない。その1つのアプローチが、「以上の理由から／により」という表現の使用である。この表現は複数の理由を受けて、結論へとつなげるものである。

## 第72期（2015年4月期）日本語研修コース

衣 川 隆 生

### 1. 受講生の概要

第72期日本語研修コースの受講生はすべて文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生であり、合計29名であった。その内訳は文系部局19名、理系部局が10名で、27名が名古屋大学に進学し、総合大学院大学、名古屋音楽大学に進学する留学生がそれぞれ1名であった。文系部局では、国際開発研究科が5名、法学研究科が5名、文学研究科が3名、国際言語文化研究科、教育発達科学研究科が各2名、経済学研究科1名であった。理系部局では、工学研究科3名、医学系研究科2名、環境学研究科、情報科学研究科、生命農学研究科、理学研究科が各1名であった。出身国籍別では、24ヶ国（ベトナム3名、アメリカ、インドネシア、ペルー各2名、アフガニスタン、イギリス、イラン、エチオピア、カメルーン、カンボジア、ギリシャ、コンゴ民主共和国、スペイン、スリランカ、スロバキア、タイ、トルコ、ネパール、ブータン、ブラジル、フランス、ミャンマー、メキシコ、ラオス各1名）であった。

今期は29名のうち、23名が日本語研修コースを受講したが、このうち、1名は研究の都合上、コース途中で全学向け日本語コースに移動した。この移動した学生を合わせて7名が全学向けの日本語講座を受講したが、このうち2人は研究の都合上初級レベルを選択した留学生であった。全学日本語コースでの内訳は、SJ101b（全学標準日本語初級前半）1名、IJ111（全学集中日本語初級）1名、IJ112（全学集中日本語初級～初中級）1名、SJ202（全学標準日本語中級後半）1名、SJ300（全学標準日本語中上級）1名であった。

### 2. クラス編成

授業は、2クラス編成とし、専任教員3名、非常勤講師7名の計10名が担当した。

### 3. 時間割と日程

例年4月期においては、7月後半まで授業を行い、夏休みを挟んで9月に授業を再開し、専門についての発表を実施して修了式を迎えるという日程であったが、第72期より8月第一週まで授業を行い、夏休みを挟んで9月に修了式を実施するという日程に変更した。

授業はこれまでのように月曜日から金曜日まで、午前8時45分から午後2時30分まで90分授業を3コマ行った。開講式の前行う到着時のオリエンテーションは4月6日（月）に行った。オリエンテーションでは、名古屋大学での日本語教育の全体像及び日本語研修コースの概要を説明し、その後、未習者には学習背景アンケート、既習者にはプレースメントテストおよびインタビュー、さらに学習背景アンケートも行った。

### 4. カリキュラム

カリキュラムは、これまでのように（1）主教材 A Course in Modern Japanese {Revised Edition}, Vols.1 & 2（名古屋大学日本語教育研究グループ編）を中心とする授業、（2）その他の活動（テーマに沿って書いて話す：楽しかったこと、趣味、国の観光地、国との習慣の違い）を行ったが、例年9月に実施していた「専門について話す」は行わず、第71期より最終週に行ったビデオ作成プロジェクト「第72期日本語研修コース紹介」を実施した。このプロジェクトは、留学生が主体となりクラスメート、教室、日本語プログラム、国際言語センター、名古屋大学など紹介したい人や場所を決定し、台本作成、練習、撮影を行うというものである。作成したビデオは修了式当日に会場でも上映された。

以下、修了アンケートの結果とともに授業内容を報

告する。第72期は18名の学生から回答が得られた。

(a) 教科書を中心とする授業（1～14週）

教科書については「教科書は日々の生活に必要な文法をカバーしている」等有用な教材であるという評価が多かったものの、「特に後半は項目が多くて大変であった」、「ビギナーにはついていくのが大変」などの分量の多さについて述べている学生もいた。

・ Drill

「有用である」と評価している学生が多いものの、文法の説明部分の理解が予習段階で難しく、授業内での教師の説明が必要だった、説明の仕方が教師によって異なるというコメントも挙げられている。また用語が一般的ではなくわかりにくいというコメントもあった。

・ Dialogue

ほぼ全員がよかった、と答えている。特に状況がリアルで有用であった、というコメントが多かった。

・ Aural Comprehension

各課の Aural Comprehension は、宿題として事前に回答してくるようになってきている。「未習語も多く、時間がかかる」、「早すぎる」というコメントを書く学生も少なからずいた。

・ Reading

Reading に関しても、よかったというコメントを半数以上の学生から得られた。また第72期より教科書の読解と合わせて、多読の授業を前半に導入した。これについては「有用であった」というコメントと「読むことを求められるが解釈を求められなかった」などのコメントもあった。

・ 漢字

漢字に関しては、「教材シートは有用」というコメントと、それとは逆に「すぐ忘れてしまうので、指導方法の再考を求める」という意見も出された。これらの意見は今後検討すべき課題である。

・ WebCMJ

例年通り、11課からは自習としたが、ほとんどの学生が利用し、また、非常に役に立つという評価が得られた。ただ、自習ではなく授業内で実施してほしいというコメントもあった。

(b) その他の活動

・ 話す練習

Discourse Practice & Activity に関しては、「非常に役に立った」という評価が得られた。スピーチアクティビティに関しても「一番好きな活動です」というコメントが得られるなど、発話に重点を置いた活動は高い評価を得られた。また、「フィードバックがあるのがよかった」というコメントもあった。

・ ビデオ作成プロジェクト

ビデオ作成プロジェクトに関して多くが高い評価を付けているものの、グループに分かれての作業であったため、コースの最後で個別になるよりは全体でできる活動のほうがいい、というコメントも寄せられた。

・ 自身の学習成果への満足度

4段階で評価してもらった。「3:とても満足」から「0:まったく満足しない」で、3名が「3」、11名が「2」、2名が「1」、無回答が2名であった。

## 5. まとめと問題点

コーディネーター自身が4月期を担当したのが初めてであったため、従来のコースと単純に比較することは難しいが、学生同士の使用言語も途中からは日本語が多くなり、非常に活発にやり取りが行われていたようである。少し日本語を学習してから来日した学生が半数、全く初めての学生の人数が半数であったため、既習者クラス、未習者クラスとして2クラスに分け開講した。このクラス編成は途中で変更することなく最後まで実施した。結果的にクラス間の交流が少なくなった部分もあり、最後のビデオ作成においても、クラス単位で行う様子も見られた。既習者、未習者のレベル差は前半終了時にはほとんどなくなるため、クラス変更を行ったほうが刺激を与えられた可能性もある。この点は今後も検討が必要である。また、大学院の入試体制が多様化し、4月期においても多くの研究科で入試が実施されるようになってきた。4月来日の留学生にとっては準備期間も短く、入試と日本語の学習を両立させることに困難を感じる学生も多い。このような入試制度の改革に対応可能な可変的なプログラムを今後検討する必要がある。

## 第73期（2015年10月期）日本語研修コース

衣 川 隆 生

### 1. 受講生の概要

第73期日本語研修コースの受講生はすべて文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生であり、合計9名であった。このうち8名が教員研修生、1名が研究留学生であった。研究留学生1名の進学先は名古屋大学国際開発研究科であり、教員研修生のうち6名が愛知教育大学へ、2名が滋賀大学へ進学する予定であった。留学生の出身国は9ヶ国(ケニア, シンガポール, スーダン, パキスタン, ボリビア, メキシコ, モンゴル, 中国, 東ティモール)であった。今回の研修生の9名のうち、3名は既習者であったため全学向けの日本語講座 IJ112 (全学集中日本語初級後半)を受講した。

このような構成でコースを開始したが、全学向けの日本語講座を受講していた研修生のうち1名は家庭の事情で12月に一時帰国し、その後1月末まで再来日できなかつたため、コースを修了することができなかった。また、名古屋大学大学院進学予定の研究留学生は、指導教員のすすめで他大学の研究科に進学することとなった。

これまで、10月期においては、学内公募として法学研究科から国費英語コース留学生を受け入れていたが、入試準備等の制約も多いこと、教員研修生と学習環境が異なることなどの理由から今期からは公募しないこととした。

### 2. クラス編成

授業は、1クラス編成(6名)とし、専任教員2名、非常勤講師7名の計9名が担当した。

### 3. 時間割と日程

時間割は、これまでのように月曜日から金曜日まで、午前8時45分から午後2時30分まで90分授業を3

コマ行った。開講式の前に行う到着時のオリエンテーションは9月28日(月)に行った。内容は第72期と同様である。

コースの日程は第61期にならい、ほぼ例年の10月期と同様である。

10月2日(金)開講式、10月5日(月)授業開始、冬期休業12月23日(水)～1月3日(日)、1月4日(月)授業再開、2月2日(火)授業終了。3月1日(火)修了式。また、例年同様1月29日(金)に愛知教育大学での交流会に留学生6名と参加した。

### 4. カリキュラム

カリキュラムは、4月期と同様、(1)主教材 A Course in Modern Japanese {Revised Edition}, Vols.1 & 2 (名古屋大学日本語教育研究グループ編)を中心とする授業、(2)その他の活動(テーマに沿って書いて話す:楽しかったこと、趣味、国の観光地、国との週間の違い)、(3)ビデオ作成プロジェクト「第73期日本語研修コース紹介」を実施した。

### 5. アンケート結果

以下、修了アンケートの結果とともに授業内容を報告する。第73期は6名の学生から回答が得られた。

まずクラス体制や専門の勉強と日本語学習の両立について聞いたところ、第73期は教員研修生がほとんどであったため、問題なかったという回答であった。1名だけであった研究留学生も「大変であったが、管理可能である」という回答であった。

(a) 教科書を中心とする授業(1～14週)

教科書については全ての学生がよかったと答えている。また「全技能が含まれているのがよかった」というコメントがあった一方、「ローマ字があればよかった」という回答もあった。

・Drill・文法の説明

Drill と文法の説明に関しても全員がよかったと答えている。

・ Dialogue

ほぼ全員がよかった、と答えているが、「動画をもっと利用してわかりやすくしてほしい」という回答もあった。また、取り上げてほしい内容として「タクシーを呼ぶ、救急車、緊急対応の会話」があげられていた。これは留学生が実生活において必要であったものであり、教科書以外でも取り上げるべき内容であると考えられる。

・ Aural Comprehension

Aural Comprehension に関しては大意把握を宿題として課している。よかったという評価がほとんどであったが、できれば授業ではディクテーションを取り入れてほしい、という要望もあった。

・ Reading

Reading に関しても、教科書に組み込まれている精読教材に加えて、多読の教材も新たに利用するようにした。それについては「多読はおもしろく学ぶ

ことも多かった」という回答が得られた。

・ WebCMJ

例年通り、11課からは自習としたが、春学期同様、授業内で扱ってほしいという声があがった。

## 6. まとめと問題点

今期は人数が少なかったこと、教員研修生がほとんどであったことなどの要因が作用して、学習者間の関係が非常に良好で、かつ親密に形成されていた。毎週末一緒に出かけたり長期休暇には一緒に旅行するなど関係が構築され、その結果、日本語学習においても生活においても常に助け合う光景が見られた。受講者の多くがコースを高く評価してくれたが、その最大の要因は関係性の深さにあると推測する。コースをコーディネートする上では、この点を考慮しながら今後のカリキュラム編成を考えていきたい。



## 第34期 上級日本語特別コース (2014年10月～2015年9月)

糊 山 洋 介

第34期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得(話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって)」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行われた。

学習者は、13カ国、19名(インドネシア:3名、韓国:2名、タイ:2名、中国:2名、アメリカ:1名、インド:1名、カンボジア:1名、スウェーデン:1名、中国[香港]:1名、トルコ:1名、ブラジル:1名、ベトナム:1名、ポーランド:1名、ミャンマー:1名)であった。また、10名の教員が指導に当たった。

以下、主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

### (1) 教科書による日本語学習(10月～4月)

『名古屋大学 日本語コース中級Ⅰ』『名古屋大学 日本語コース中級Ⅱ』『名古屋大学 日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『名古屋大学 日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』(以上、名古屋大学日本語教育研究グループ編)を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト(予習のチェック)」「復習クイズ」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト(筆記テストおよび話すテスト)を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

### (2) 応用会話(10月～4月)

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから、社会における様々な場における会話力(表現力、運用能力)を高めることを狙いとして、「応用会話」を行った。教材として、各種のモデル会話などを作成し、使用した。

### (3) 入門講義・特殊講義(10月～7月)

日本に関する基礎知識を身に付けること、レポート

のための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして、10月～2月(前期)および4月～7月(後期)の期間、それぞれ5つの分野の入門講義を14回(各90分)行った。前期は、「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」「日本文学Ⅰ」であり、後期は、「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」「日本文学Ⅱ」であった。学生は、前期は5科目のうち3科目以上を選択、後期は5科目のうち2科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

また、特殊講義(必修)として「音声学」(90分×7回)を行った。

### (4) 作文(レポートのための基礎訓練)(1月～5月)

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」「論文で使われる言葉」などについて学習した。

### (5) 発展読解(10月～4月)

発展読解として、「精読」(教科書の読解教材に代わるもの)、「新聞読解」、「問題付き読解」(生教材に読解の手助けとなる問題を付したもの)、「本の読解」(エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択)、「特別読解」(学習者が、新聞などから自分で記事を見つけ、授業でも教師役をする)などを行った。

### (6) 上級文法・語彙(兼N1対策)(10月～4月)

上級レベルの文法・語彙の練習問題(14回分)を作成し、使用した。これは、日本語能力試験(N1)の準備を兼ねるものである。



**(7) スピーチ (10月～7月)**

自国の紹介、自分がふだん考えていることをはじめとする様々なトピックについて、学生がスピーチを行った(1人, 1回, 10分程度, スピーチ後に質疑応答/各学生, 年2回実施)。

**(8) レポート (1月～7月)**

学生各自がテーマを決め、教員の個別指導のもとでレポートを作成した。分量はA4, 15～30枚程度である。なお、今期は、「論文」「随筆」「創作」「報告」「作文」という5つのカテゴリーの中から、学生が1つを選んで取り組むこととした。その内訳は、論文:18名、作文:1名であった。研究成果は『2014～2015年度日本語・日本文化研修生 レポート集』(439ページ)として発行した。また、中間発表会(5月, 発表:20分/質疑応答:10分)、最終発表会(7月, 発表:20分/質疑応答:5分)を実施した。レポートの題目は以下の通りである。

(1) 論文

1. インタン・セティアティ・ハンリニ (インドネシア)「日本におけるアイドルの文化～女性アイドルの女性ファンを中心に～」
2. エーミヤインミヤツモー (ミャンマー)「日本とミャンマーの正月」
3. 金・エソル (韓国)「日本の中・高等学校の部活動ー韓国の教育に取り入れるべき点ー」
4. グエン・フィン・フーン・キャン (ベトナム)「日本のハンコ社会」
5. サルミディ (インドネシア)「小説の比喩」
6. シャルマ・ヘマント (インド)「日本の食料自給率」
7. ジョンズ・美花 (アメリカ)「日本の(不思議な)猫文化ー江戸時代と現代の猫ブームの繋がりを中心にー」
8. ゼン シュウケイ (中国)「社会発展の鏡ー新語の定義と形成の原因を中心に」
9. タンインラムメイ (中国 [香港])「日本の伝統芸能の伝承について」
10. チャイワッチャラ リムソムキャット (タイ)「日本の若者の恋愛と結婚についてータイの若者と比較してー」
11. デービッド・アバルカ (スウェーデン)「日本の職場における男女格差ースウェーデンと比較して

ー」

12. トウラキエヴィチ・ゾフィア (ポーランド)「日本語ポーランド語コードスイッチングのバイリンガル研究」
13. ナム・ソツティエー (カンボジア)「「オタク」って何者?ー日本人および外国人から見たオタクー」
14. ファンニナヨラ (インドネシア)「身体部位詞「手」の慣用的表現の分析ー日本語とインドネシア語の対照研究ー」
15. プンヤヌット・クンレン (タイ)「タイにおいて人工妊娠中絶は合法化されるべきかー主に経済的理由によるー」
16. メルベ・ダー (トルコ)「日本の新聞各社が報じるイスラムをめぐってー国際的な事件を例としてー」
17. 陸娥榮 (ユク アヨン) (韓国)「動物に関する日韓の表現の比較」
18. リュウ エイ (中国)「花火から日本人の心をさぐる:ー瞬の夢 無限の輝き」

(2) 作文

1. ベルナルジノ・アネリサ・マナミ (ブラジル)「日系ブラジル人社会:共存問題と差別問題」

**(9) 総合演習 (12月/5月～7月)**

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして、前期と後期の両学期に総合演習を行った。教材は新聞・雑誌の記事やテレビ番組などを使用し、学生は多様な言語活動を行った。テーマは以下の通りである。

- 前期:「名古屋の食べ物について調べる」(1週間)  
後期:「ことばと遊び」(1週間), 「なごやのお菓子とやきもの」(3週間), 「日本人とスポーツ:心技体の世界」(1週間)

なお、「お菓子とやきもの」についての総合演習では、6つのグループに分かれて、調査・インタビュー等を行い、ジンを作成した。調査担当者、ジンのタイトルは以下の通りである。

1. エイ・サツキ・ファンニ・マナミ「夏の楽しみ:「和」の味を器にもる」

2. キャン・ゾフィア・パーン「夏菓子（なつかし）」
3. アヨン・インタン・ゼン「和菓子：片隅に旅は三人かき水」
4. ミディ・モー・ハマント「和菓子」
5. ミカ・メルベ・ソル「和菓子」
6. チャイ・ソツティー・デービッド「わがわがし」

#### (10) 漢字テスト・漢字コンクール（10月～7月）

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして、「漢字テスト」（20回）を行った。また、漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」（4回）を実施した。

#### (11) その他

以上に加えて、独話練習、討論会（ディベート）、ことばのクラス（ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム）なども行った。さらに、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本：異文化を通じた日本理解」にも参加した。

#### (12) アンケート

2015年7月に、学習者に対して、コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて、アンケート結果を紹介する（15名分）。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	0人	6人	9人

#### (13) 今後の課題など

上記の通り、今期は、これまで希望する者が多かった「上級レベルの文法・語彙」の学習を実施した。これは、日本語能力試験（N1）の準備を兼ねるものである。14回分の練習問題を作成し、授業を行った。また、学生に好評であり、「上級文法・語彙（兼N1対策）」は役に立ちましたか」という質問についてのアンケート結果は以下の通りである。来年度以降、教材をさらに充実させたい。

	役に立たなかった		役に立った	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	0人	2人	13人

また、上記の通り、「漢字テスト」（20回）および「漢字コンクール」（4回）を定期的に行い、漢字学習を促してきたが、近年、漢字に対する取り組みの個人差がますます大きくなっている。漢字学習に対する意欲が低く、十分に身につかない学習者に対する具体的な方策を考えることも今後の重要な課題である。

## 全学向け日本語プログラム 2015年度

李 澤 熊

全学向け日本語プログラムは、名古屋大学に在籍する留学生(大学院生、研究生など)、客員研究員、外国人教師などを対象に、日常生活や大学での研究生活に必要なとされる日本語運用能力の養成を目指して開講されている。

2015年度は昨年度に引き続き、日本語プログラムを見直し、効率を図るとともに、全学留学生を対象とする全学向け日本語講座の拡充計画を立案し、実施した。

### 1. 2015年度の概要

1) 2015年度は、前期・後期に「集中コース (IJ コース) と「標準コース (SJ コース)」を開講し、アラカルト授業として「オンライン日本語コース」「漢字コース」「入門講義」「ビジネス日本語コース」を開講した。集中コースは、短期交換留学生の受講が多いということもあり、週20時間4レベル6クラスを設けた。なお、集中コースはすべて午前の開講となった。

標準コースは、7レベル10クラスを設けた。上級レベルについては受講者が多かったため、2クラス体制をとった。なお、「グローバル30コース」に対応するために、標準コースの一部 (SJ101～SJ202) の開講時間帯を午前に変更した。

後期については、(集中・標準コースの) 初級 I レベルの受講者数が例年より多かったため、従来の2クラス体制から3クラス体制をとった。

### 2. 期間と内容

- 1) 前期開講期間：2015年4月13日 (月) ～7月29日 (火) 14週間
- 2) 後期開講期間：2015年10月5日 (月) ～2016年1月25日 (月) 14週間
- 3) 開講クラスと内容：

- 2) 今年度は、既存の日本語プログラムを見直し、さらに効率を図った。まず、受講登録をより円滑に行えるように、ホームページを刷新した。また、(特に) 後期の開講時期を全学の一般の授業日程とあわせることにより、スムーズなコース運営を図った。
- 3) 例年と同様、初級Ⅱ以上を希望する受講者を対象にクラス分けテストを実施し、日本語能力レベルに応じたクラス編成をした。なお、今年度もクラス分けテストの会場を2つ設け、上級レベルを希望する者については、別途にテストを実施した。
- 4) 各クラスにおいて、出席および成績の管理を行い、授業終了時に出席率および成績から合格者を発表し、合格者は次期進級する際クラス分けテストを免除している。再履修者についても同様である。ただし、上級における再履修者は定員を超える申し込みがあった場合、受講を制限することになっている。
- 5) 全学向け日本語プログラムは、基本的には単位取得をする授業ではないが、短期交換留学生に関しては、別途に単位認定基準を設け、単位認定を行った。全学向け日本語プログラムと NUPACE 日本語の成績処理方法を統一し、コース運営の効率化を図った。
- 6) 「学生の出入りが激しい」という問題点を解消するために、登録の時に指導教員による「受講承諾書」の提出を義務化した。
- 7) FD 活動の一環として学生によるコース評価をレベル・科目別に行った。

コース 科目	レベル クラス数	目 標	教 材
標準コース (standard)	初級 I SJ101	日本語がほとんどわからない学生を対象に、日本語文法の初歩的な知識を与えると同時に日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字100字, 単語数800語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vol.1 &amp; CD</i>
	初級 II SJ102	初級 I 修了程度のレベルの学生を対象に、さらに基礎日本語の知識を与えると同時に日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字, 単語数900語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vol.2 &amp; CDa</i>
	初中級 SJ200	初級 I, II で学んだ文法事項の運用練習を行うとともに、中級レベルで必要となる漢字力, 読解力を含め、日本語運用能力の基礎を固める。(漢字200字, 単語数1000語)	国際言語センター開発教材
	中級 I SJ201	初中級修了程度のレベルの学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、4技能全般の運用能力を高める。(漢字300字, 単語数1200語)	『現代日本語コース 中級 I』
	中級 II SJ202	中級 I 修了程度のレベルの学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、大学での勉学に必要な日本語能力の基礎を固める。(漢字400字, 単語数2000語)	『現代日本語コース 中級 II』
	中上級 SJ300	中級 I, II で学んだ学習項目を実際の場面で使えるよう運用練習を行い、上級レベルの日本語学習の基礎を固める。(漢字500字, 単語数3000語)	国際言語センター開発教材
	上級 SJ301	中上級修了程度の学生を対象に、大学での研究や勉学に必要な口頭表現, 文章表現の能力を養う。(漢字800字, 単語数4000語)	国際言語センター開発教材
集中コース (intensive)	初級 I IJ111	日本語がほとんどわからない学生を対象に、日本語文法の初歩的な知識を与えると同時に日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字, 単語数800語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vols.1, 2 &amp; CD</i>
	初級 II IJ112	標準コース初級 I 修了程度の学生を対象に、日本語文法の基礎を固め、日常生活だけでなく勉学に必要な基礎的日本語運用能力を養う。(漢字250字, 単語数1000語)	<i>A Course in Modern Japanese, Vos. 2 &amp; CD, 作成教材</i>
	中級 I IJ211	集中コース初級 I または標準コース初級 II 修了程度の学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、4技能全般の運用能力を高める。(漢字300字, 単語数1200語)	『現代日本語コース 中級 I』および国際言語センター作成教材
	中級 II IJ212	集中コース初級 II または標準コース初中級修了程度の学生を対象に、4技能全般の運用能力を高め、研究に必要な日本語能力の基礎を固める。(漢字400字, 単語数2000語)	『現代日本語コース 中級 I・II』
漢字コース (kanji)	漢字1000 KJ1000	漢字300字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験 N3-N2 程度の漢字1000字を目標に学習する。	『漢字マスター Vol.3 2級漢字1000』
	漢字2000 KJ2000	漢字1000字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験 N2 の上から N1 程度の漢字約2000字およびその語彙を学習する。	『日本語学習のためのよく使う順 漢字 2100』
入門講義 (introductory)	次の専門分野を日本語でやさしく解説する講義形式の授業である。日本語運用能力を高めるとともに、日本理解を助ける科目である。標準コース中上級レベル以上の日本語能力が受講資格である。		
	国際関係論 I・II IR200	I: グローバリゼーションは開かれた社会・経済を推進し、商品、思想などが縦横無尽に世界を駆け抜ける。さらに、ネットワーク社会の出現は人権やアイデンティティー意識の高揚をもたらしている。しかしながら、グローバリゼーションの行く末を案ずる声も大きくなってきている。グローバリゼーションをめぐる賛否両論を紹介する。 II: グローバリゼーションをキーワードとして、いくつかの認識方法を手がかりに、現代国際環境の変容を見る。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本文化論 I・II JC200	I: この講義では、日本の家族や学校をめぐる最近の問題を取りあげ、受講者の出身国の事例と比較しながら、日本の社会や文化の特徴を議論していく。取りあげるテーマは、夫婦別姓、国際結婚、いじめ、不登校、フリーターなど。 II: 日本の社会や文化の特徴をより深く理解するために、韓国を比較の対象として取りあげ、東アジアにおける「近代」(西洋文明との出会い)の意味を考える。	講読文献などは授業中に適宜指示する。

コース 科目	レベル クラス数	目 標	教 材
入門講義 (introductory)	言語学Ⅰ・Ⅱ GL200	Ⅰ：主に現代日本語を素材として、言語学の基礎を学ぶ。取り上げるテーマは、言語学の基本的な考え方、人間の言葉の一般的特徴、言葉の意味（意味論）、言葉と社会（社会言語学）、世界の言語と日本語（言語類型論）である。 Ⅱ：言語学の一分野である意味論（認知意味論を含む）について学ぶ。特に、現代日本語を素材として、類義表現・多義表現などの分析方法を身につけることを目指す。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本語学Ⅰ・Ⅱ JL200	Ⅰ：主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ、整理・検討することによって、文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。取りあげるテーマは品詞、ボイス、テンス、人称、活用等 Ⅱ：主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ、整理・検討することによって、文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本文学Ⅰ・Ⅱ NL200	Ⅰ：日本の詩歌について、万葉集（日本最古の和歌集）からJ-POPの歌詞まで、時代を追って鑑賞する。奈良時代から江戸時代までを概観する。 Ⅱ：日本の詩歌について、万葉集（日本最古の和歌集）からJ-POPの歌詞まで、時代を追って鑑賞する。明治時代から現代までを概観する。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
オンライン・ 日本語コース	・中上級読解作文 OL300 ・オンライン漢字 OLkj	中級レベルを修了した学習者を対象に、400字～600字程度の文章の理解とその文章の要約や関連作文を課し、文章表現能力を養う。 初中上級レベルの学習を修了した学習者を対象とした漢字のクラスを開講している。毎週1回オフィスアワーを開講する。	Moodle 版日本語教材
ビジネス日本語 Business	ビジネス日本語 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ	BJ400 将来、日本の企業に就職を希望する人はもちろん、日本人のビジネスコミュニケーションに対する理解を深めたい留学生を対象とし、日本のビジネス・マナー及びビジネスで用いられる日本語表現を身につける。	Ⅰ：『ビジネスのための日本語・初中級』 Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ：『新装版 商談のための日本語・中級』

(入門講義科目の「Ⅰ」は秋学期に、「Ⅱ」は春学期に開講する。)

(ビジネス日本語の「Ⅰ、Ⅲ」は秋学期に、「Ⅱ、Ⅳ」は春学期に開講する。)

### 3. 受講生数

#### 1) 標準コース

	前期		後期		
	登録者数	修了者数	登録者数	修了者数	
初級Ⅰ（2クラス）	34	27	初級Ⅰ（3クラス）	80	65
初級Ⅱ	17	11	初級Ⅱ	23	14
初中級	16	11	初中級	30	18
中級Ⅰ	16	11	中級Ⅰ	27	19
中級Ⅱ	29	22	中級Ⅱ	28	22
中上級	35	21	中上級	29	23
上級（2クラス）	30	20	上級（2クラス）	56	38
漢字1000	48	25	漢字1000	52	33
漢字2000	30	21	漢字2000	24	14
国際関係論	33	19	国際関係論	27	21
日本文化論	50	37	日本文化論	45	33
言語学	22	16	言語学	39	28
日本語学	24	15	日本語学	45	23
日本文学	23	18	日本文学	42	33
ビジネス日本語Ⅱ	41	21	ビジネス日本語Ⅰ	41	27
ビジネス日本語Ⅳ	34	24	ビジネス日本語Ⅲ	22	14
Online 日本語	36	21	Online 日本語	53	32
計	518	340	計	663	457



## 2) 集中コース

	前期		後期		
	登録者数	修了者数	登録者数	修了者数	
初級I・II (2クラス)	13	10	初級I・II (3クラス)	37	32
初級II・初中級	13	10	初級II・初中級	15	13
初中級・中級I (2クラス)	21	18	初中級・中級I (2クラス)	25	20
中級I・II	17	16	中級I・II	18	13
計	64	54	計	95	78

## 4. 学生によるコース評価

昨年度と同様に授業改善と教授能力の向上を図るために、前期と後期に受講者を対象に、コース内容に関するアンケートを実施した。回答者数（短期交換留学生を含む）は前期と後期、それぞれ118名と133名である。

アンケートの内容はレベルによって異なるが、各レベルに共通して尋ねた質問のうち3つの項目について報告する。

質問1：勉強したことがよく理解できたと思いますか。

質問2：授業内容は自分にとって役に立ったと思いますか。

### 前期

	Q 1	Q 2	合計
そう思う	46	66	48%
どちらかといえば「はい」	50	39	38%
どちらとも言えない	18	9	11%
どちらかといえば「いいえ」	4	4	3%
そう思わない	0	0	0%
回答者合計	118	118	100%

### 後期

	Q 1	Q 2	合計
そう思う	64	98	61%
どちらかといえば「はい」	48	24	27%
どちらとも言えない	17	7	8%
どちらかといえば「いいえ」	2	2	2%
そう思わない	2	2	2%
回答者合計	133	133	100%

以上の結果から分かるように、全般的に良好な評価結果が得られた。ただ、受講者によっては「会話の授業で日本人と話せる時間を増やしてほしい」「会話の授業以外でも、話す機会を増やしてほしい」「授業の中で、漢字の練習をもっとしたかった」「作文の授業で、専門分野と関係のある内容を取り上げてほしい」「作文

で、レポート・論文の書き方も勉強したかった」「敬語の勉強をもっとしたかった」というような指摘もあった。今後、このようなニーズに対応していくために、さらに工夫が必要であろう。

質問3：日本語の授業について意見やアドバイスがあったら書いてください。

この質問には様々な回答があったが、全般的に寛大な評価が多かった。しかし、中には以下のような要望も出ており、今後さらなるプログラムの改善に努める必要があると感じた。

- ・「(レベルによっては)一クラスの学生の人数が多い」
- ・「アカデミックジャパニーズの科目を設けてほしい」
- ・「日本語能力試験のためのクラスを設けてほしい」
- ・「作文のクラスは中級レベルから導入してほしい」

## 5. 今後の課題

以上のように、2015年度は昨年度の実施結果を踏まえ、留学生の多様なニーズに対応するために、さらにコースの改善を図った。例えば、上でも述べたように、受講登録をより円滑に行えるように、ホームページを刷新し、また、(特に)後期の開講時期を全学の一般の授業日程とあわせることにより、スムーズなコース運営を図った。

しかし、ここ数年、本学では国際化戦略に伴い、留学生を対象とした様々なプロジェクト型の教育が積極的に行われており、日本語教育を担っている本センターの役割はさらに重要になることが予想される。

そこで来年度は、既存の日本語プログラムを見直し、さらに効率を図る予定である。具体的には、現在短期交換留学生(NUPACE)の日本語コースは、全学向け日本語プログラムに組み込まれた形で運営してい

るが、様々な問題を抱えているため、今後独立コース の設置に向けて準備を進めていく予定である。

## 学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

浮 葉 正 親

学部 に在籍する留学生が大学で所定の単位を取得していくためには、講義を聴く、ノートをとる、ゼミで発表する、レポート・答案を書く、ディスカッションをするなど、高度な日本語運用能力が要求される。授

業ではそのための訓練を行うとともに、日本人学生や教員とのコミュニケーション能力の育成や日本社会・文化に対する理解を深めることを目的としている。

2015年言語文化科目「日本語」の科目および受講者数は以下の通りであった。

期	対象	内容	時間	担当者	受講者数
1期（1年前期）	文系	文章表現	月3限	國澤里美	8
		口頭表現	木3限	西田瑞生	8
	理系	文章表現	火2限	依山雄司	3
		口頭表現	木2限	西田瑞生	3
	工学（国）	口頭表現	月2限	國澤里美	5
		文章表現	水2限	魚住友子	5
	工学（私）	文章表現	月2限	浮葉正親	8
		口頭表現	水2限	鷺見幸美	8
2期（1年後期）	文系	文章表現	金2限	國澤里美	7
		口頭表現	木3限	依山雄司	8
	理系	文章表現	火2限	浮葉正親	2
		口頭表現	木2限	西田瑞生	2
	工学（国）	口頭表現	月2限	西田瑞生	5
		文章表現	水1限	魚住友子	5
	工学（私）	文章表現	月2限	國澤里美	9
		口頭表現	水1限	鷺見幸美	9
3期（2年前期）	文系	文章表現	火1限	浮葉正親	14
4期（2年後期）	文系	文章表現	木1限	浮葉正親	13

### クラス

文系：文学部・教育学部・法学部・経済学部・情報文化学部社会システム情報科

理系：医学部・理学部・農学部・情報文化学部自然情報学科

工学（国）：工学部（国費留学生・政府派遣留学生）

工学（私）：工学部（私費留学生・日韓理工系留学生）

### 授業内容

#### 1年前期

#### 文系・文章表現

レポートを作成するために、文体・アカデミックワードなどの文章表現、引用・要約の仕方を学習した。実際に学習者がアウトラインを立て、それをグループで検討した上で、レジュメ・レポートを作成した。また、大学生活で必要な文章表現技術の向上を目指し

て、データ・資料の読解、説明文・意見文の作成を行った。さらに、依頼・提案・謝罪のメールの練習も取り入れた。

#### 文系・口頭表現

大学生生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるための練習をした。とくに、構造的なわかりやすさということに注目し、いくつかのトピックを



話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグループリング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較、対照によってわかりやすくする方法なども学んだ。

#### 理系・文章表現

短い文章からはじめて徐々に長い文章を書く練習を行った後で、各自がテーマを設定し、いくつかの文章を読んでまとめる最終レポートを執筆した。最終レポートについては、テーマ設定、材料集めやアウトラインの作成などを授業中の作業や宿題によって少しずつ進めていった。また、その過程で、「協働学習」の方法を取り入れ、受講者同士でお互いが書いたものについて検討したり、コメントしたりする活動を行った。

#### 理系・口頭表現

大学生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズな口頭表現ができるようになるための練習をした。とくに、構造的なわかりやすさということに注目し、いくつかのトピックを話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグループリング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較、対照によってわかりやすくする方法なども学んだ。

#### 工学系（国費）・文章表現

読解能力と論理的文章作成の基礎力養成を目的に、日本の大学生・文化・社会や科学技術を扱った新聞等（放射能、非正規雇用、環境問題等々）の読解、要約・意見・ポイントを整理して書く練習を行った。その他、板書文字、文体、句読点、原稿用紙やメール・レジユメの書き方の学習、期末発表を行った。

#### 工学系（国費）・口頭表現

自分の意見を効果的に伝えるために、スピーチ、ディスカッション、プレゼンテーションの仕方を学習した。具体的には、学習者が関心のあるニュース・トピックについて、情報を整理し、伝達する活動を行なった。また、それを踏まえてディスカッションも行なった。プレゼンテーションの実践では、発表の表現・質疑応答の仕方を学び、レジユメ・スライドを作成した

#### 工学系（私費）・文章表現

大学生活で必要な文章表現技術に関して協働活動を通して学習した。メールによる連絡・依頼文の作成、簡単な機械の使い方マニュアルなどの説明文の書き方、資料を活用した意見文などを書く練習を行った。また、レポートを作成するために必要なアウトラインの立て方、引用・要約の仕方、レジユメの作成など基本的技能を段階的に学習した。

#### 工学系（私費）・口頭表現

1) 各自選択した新聞記事を題材に3分間スピーチを行った。録音・文字化したものをもとに、自己評価・他者評価を行った。2) 自律的学習能力の向上を目的とし、自己課題を設定し、毎週自らの取り組みを評価した。取り組みをノートに記録し、それを教師評価の対象とした。3) スライドを活用したプレゼンテーションの実践を通して、発表及び質疑応答の仕方を学んだ。テーマ設定から評価基準の設定まで協働的な活動を重視した。

#### 1年後期

#### 文系・文章表現

学習者が自分自身の関心に沿ってテーマを決め、必要な資料を収集し、レジユメ・レポートを作成するという活動を複数回行なった。一連の活動において、グループでの検討・修正を行ない、自己修正できるようになることを目指した。また、前期で学習した内容を踏まえ、より高度な引用・要約の練習、意見文の作成、図表の説明を行なった。

#### 文系・口頭表現

「仕事」「子育て」「結婚」「介護」をテーマとした新聞記事などを読んだ後、その内容を元にディスカッション・ディベート・プレゼンテーションを行った。授業では、新聞記事に用いられている語彙や表現のうち、上記の活動で使用可能な表現を取り上げ、練習した。また、各活動の後には、「役立ちそうな表現」「自分の話し方の利点・欠点」「その活動の際に大切だと思うこと」について記述させ、学期末に振り返りを行った。

#### 理系・文章表現

実際の科学技術論文を読み、その中で使われる書式や表現を学習した。また、語彙・表現を増やす目的で

学習者の関心のある書籍を多く読み、それに関するレジュメやレポート作成を実際に行った。文章の要約や引用の仕方、図表の作り方やその説明など、レポート作成のための文章を書く練習をおこなった。

#### 理系・口頭表現

前期に引き続き、談話をわかりやすくする構造的条件を考えながら、より魅力的に話す練習をした。プレゼンテーションソフトを使用し、スライドを見せながら話す練習、スライドなどを使用せずキーワードのみを提示して魅力を伝える練習をした。店舗と商品について、あるいは、映画について、ほかの人が興味をもつようなプレゼンテーションするということを通して、学生間でよいところを学びあった。手順とルールをわかりやすく説明する方法も学んだ。

#### 工学系（国費）・文章表現

さらに高度な文章表現能力の養成を目的に、図表の説明・引用・レポートの書き方を学び、レポートを2回作成・発表した。1回目はグループ作業で、資料丸写し防止と分析力養成のため、図表を元に分析して書いた。2回目は個人作業で、図表以外の文書資料も読んで書いた。どちらもテーマは自由とした。学習態度には個人差が大きかった。

#### 工学系（国費）・口頭表現

大学生生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるための練習をした。とくに、構造的なわかりやすさということに注目し、いくつかのトピックを話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグループリング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較、対照によってわかりやすくする方法なども学んだ。

#### 工学系（私費）・文章表現

学習者が自分自身の関心に沿ってテーマを決め、必要な資料を収集し、レジュメ・レポートを作成するという活動を複数回行った。一連の活動において、グループでの検討・修正を行ない、自己修正できるようになることを目指した。また、より高度な引用・要約

の練習、意見文の作成、図表の説明を行なった。

#### 工学系（私費）・口頭表現

1) デイバート: 3つのテーマで行なった。毎回振り返りシートの記入を課題とし、翌週にはクラスで振り返りを行った。2) スピーチ: 自分で選択した新聞記事を題材に3分間話し、自分で録音・文字化したものをもとに、自己評価・他者評価を行った。3) 読書活動: 授業外の課題として現代小説を一冊読み切ること課題を課し、授業では中間報告会と読後報告会を行なった。4) 言葉遊び: 川柳の鑑賞と川柳の作成を行った。

#### 2年前期

##### 文系・文章表現

日本社会・日本文化に関する文献等を読み理解を深めるとともに、レポートや卒業論文に必要な論理的な文章の書き方を学んだ。小学校での英語教育導入、大学生の就職活動をめぐる問題の中からテーマを選び、資料を読みながら、アウトラインと序文を作成した

#### 2年後期

##### 文系・文章表現

前期で学んだ内容をふまえ、より高度な読解力、文章表現力の向上を目指した。要約と引用の方法を中心に学び、興味のある本の内容を紹介するレポートを作成した。ここ数年話題となった新書を十数冊準備し、選んでもらった。

#### 授業アンケートの結果

例年のように、授業終了時に行われたアンケート結果では、ほぼ全項目において非常に高い評価を得た。主な項目を下に示す。(4点満点)

- ・この授業はシラバス等で説明された授業目標や評価方法に沿って行われましたか (3.8)
- ・この授業に意欲的・自発的に取り組むことができましたか (3.6)
- ・この授業で設定された学習内容を理解できましたか (3.8)
- ・担当教員の熱意や工夫を感じましたか (3.8)

## 短期留学生日本語プログラム 2015年度

石 崎 俊 子

### 1. 2015年度の概要

短期留学生は日本語プログラムを受講することで単位取得が可能である。2014年度においては、1日1コマの「標準日本語コース (SJ コース)」7レベル、1日2コマの「集中日本語コース (IJ コース)」4レベル、「漢字コース」2科目(うち、漢字2000はアカデミック日本語Vとして提供されている)、「入門講義」4科目に加え、「ビジネス日本語」4科目、アカデミック日本語8科目において単位認定を行った。

このうち、標準日本語コースの初級レベル (SJ101, SJ102) と集中日本語コースの初級～初中級レベル (IJ111, IJ112) においては、総合的な日本語能力を身につけるために、週5日出席すること義務づけている。SJ101, SJ102は1日1コマ・週5コマ・全70コマのコースであり、これらのコースを修了した学生には5単位を認定している。また、IJ111, IJ112は1日2コマ・週10コマ・全140コマのコースであり、これらを修了した学生には10単位を認定している。

SJ200以上のレベル、及びIJ211以上のレベルの学生は、レベルやニーズに合わせて文法・談話、読解、聴解、会話、作文のクラスを技能別に登録することが可能である。学生は1科目から最大5科目まで履修登録することができる。また、技能習熟度に合わせて配置されたレベルよりも下のレベルのクラスを登録することも可能である。ただし、2レベルで同じ名称の科目を登録することは認めていない。またSJコースとIJコースの科目を両方取ることはできない。SJコースに登録した学生はSJコースの科目のみ、IJコースに登録した学生はIJコースの科目のみ履修することができる。コース修了時、SJにおいては1科目1単位を、IJコースにおいては1科目2単位を認定している。

「漢字コース」は「漢字1000」1単位、「アカデミック日本語V (漢字2000)」1.5単位を認定している。

以上の「標準日本語コース」、「集中日本語コース (IJコース)」、「漢字コース」の詳細に関しては全学向けプ

ログラムの報告を参照いただきたい。

上記に加え、日本語能力試験N2、または旧日本語能力試験2級合格者に対しては、春学期、秋学期それぞれ4科目開講している入門講義の受講も認め、1科目につき2単位を認定している。

また、グローバル30プログラムの学生を対象に開講されているビジネス日本語に加えてアカデミック日本語4科目も短期留学生が受講した場合、1科目1.5単位を認定している。

### 2. 前年度からの変更

2015年度秋学期よりオンラインでの科目登録と成績入力が導入された。NUPACE Online Course Manager (OCM) では学生がオンラインで履修登録した状況を担当の教員がパスワードでアクセスして確認でき、成績の入力もできるようになった。又、2015年度の秋学期は初級の標準コースの履修希望の学生が多かったことから例年の2クラス体制で行っているSJ101のクラスを3クラスに増やし、そのうちの1クラスはNUPACEのみに変更した。

### 3. 成績評価

2015年度より履修取り下げが可能になった。授業の開始より8週目までに履修取り下げをすると、FではなくWとなり、単位の取得はできないが、Fが成績として残ることが避けられる。2015年春以降の成績認定基準は以下のとおりである。

表1 成績認定基準

成績	成績評価 (100点満点)
A*	100-90
A	89-80
B	79-70
C	69-60
F	59以下
F*	60点以上であるが、出席率が80%以下
W	履修取り下げ

#### 4. 登録・成績状況

表2は春学期と秋学期の標準日本語コース、表3は集中日本語コースの登録者数を示したものである。登録者数は春学期には短期留学生の84%に相当する103名中92名（異なり数）が、秋学期においては89%に相当する110名中98名（異なり数）が日本語を受講している。2014年度には、春学期には88%、秋学期においては84%の受講率であったので、2015年度は春学期は少し割合は減少したが、秋学期は若干の増加傾向が見られた。

一方、受講者の延べ人数でみると、標準日本語コースの受講生が春学期に214名、秋学期に183名となっている。2014年度の春学期203名、秋学期211名と比較すると春学期の人数は若干増えているが秋学期は大幅に減少している。一方、集中日本語コースの受講生は春学期に89名、秋学期に97名となっている。この数は2014年度の春学期125名、秋学期87名と比較すると春学期が大幅に減少している。

過去3年間の登録状況を見ていると標準コースの初級のクラスの受講者の人数が大幅に増えており、2013年度に比べると2015年度はおよそ2倍となっている。一方、集中コースの初中級（IJ112）はもともと人数が多いクラスではなかったが、2013年に比べると春学期では半分に、秋学期では3分の1まで減少している。

#### 5. 今後の課題

春学期も秋学期も標準コースの初級の学習者が増加したことから、初級のクラスを増設を計画する必要があると思われる。又、上級のクラス（SJ300, SJ301）はNUPACEの学生だけで15人になることもあり、全学の学生と合わせると30人を超える場合もあるのでクラスを増設するかもしくはNUPACEのみのクラスを新設することが必要になるかもしれない。履修人数の変化に伴ったクラス編成を考えていくことがこれからの課題である。

表2 標準日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
SJ101	12	19
SJ102	7	4
SJ200会話1&2	2	3
SJ200読解	2	5
SJ200聴解	1	4
SJ200文法・談話	2	3
SJ201会話1&2	2	3
SJ201読解	2	4
SJ201聴解	2	4
SJ201文法・談話	2	3
SJ202会話1&2	6	0
SJ202読解	5	1
SJ202聴解	7	0
SJ202文法・談話	6	0
SJ300会話1	14	6
SJ300会話2	13	6
SJ300読解	13	4
SJ300聴解	14	5
SJ300文法・談話	13	5
SJ301会話	1	4
SJ301読解	2	4
SJ301聴解	3	5
SJ301作文I	3	3
SJ301作文II	3	5
漢字1000	13	25
漢字2000	11	14
ビジネス1		12
ビジネス2	11	
ビジネス3		10
ビジネス4	14	
アカデミック（聴解・発表）1		0
アカデミック（聴解・発表）2	3	
アカデミック（聴解・発表）3		9
アカデミック（聴解・発表）4	12	
アカデミック（聴解・作文）1		3
アカデミック（読解・作文）2	4	
アカデミック（読解・作文）3		10
アカデミック（読解・作文）4	9	
	214	183

表3 集中日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
IJ111	9	11
IJ112	2	5
IJ211会話1&2	2	9
IJ211読解	12	8
IJ211聴解	10	10
IJ211文法・談話	9	9
IJ212会話1	9	10
IJ212会話2	9	9
IJ212読解	9	9
IJ212聴解	9	8
IJ212文法・談話	9	9
	89	97



## 第16期 日韓共同理工系学部留学生予備教育コース

俵 山 雄 司

### 1. コースの概要

このコースでは、1998年の日韓共同宣言で提言された「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」に基づき発足した「日韓共同理工系学部留学生事業」により配置された韓国人留学生に対し、学部入学前の予備教育として日本語教育などを提供している。

コースの目的は、以下の3つである。(括弧内は、目的に対応する科目名)

- (1) 工学部入学後の勉学や生活に役立つ日本語運用能力を養成する(会話, 聴解, 作文, 読解, 文法, 漢字・語彙, 応用会話, オンライン日本語)。
- (2) 日本文化に対する理解を深める(日本事情, 全学教育科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」)
- (3) 専門教育の土台となる基礎知識を確認する(物理, 化学, 数学)

第16期となる今期は、平成27年10月6日から28年3月1日までの6か月(実質18週)間、7名の学生を対象に開講された。

### 2. カリキュラム

#### (1) 科目内容

- ・会話：主にキャンパス内で出会う場面を想定して、特定の目的のある対面会話について、コミュニケーションの摩擦や挫折を生じさせることなく行う力を養成する。週3コマ。『現代日本語コース中級Ⅰ, Ⅱ』(名古屋大学出版会)使用。
- ・聴解：キャンパス内外で出会う場面を想定して、自然な対話や独話のポイントとなる事柄を聞き取る力を養成する。週3コマ。『現代日本語コース中級Ⅰ, Ⅱ聴解ワークシート』(名古屋大学出版会)使用。
- ・作文：「である」体や書きことばに習熟する。また、段落や文章の内容的まとまりを意識して、読みやすい文章が書ける力を身につける。週1コマ。『改訂版

留学生のための論理的な文章の書き方』(スリーエーネットワーク)使用。

- ・読解：日本語で書かれた様々な文章を読み、理解する能力を身につける。週1コマ。『改訂版大学・大学院 留学生の日本語1 読解編』(アルク)使用。
- ・文法：これまでに学んだ文法事項を体系的に整理し、復習する。週1コマ。『現代日本語コース中級Ⅰ, Ⅱ』(名古屋大学出版会)使用。
- ・漢字・語彙：日本での学生生活に必要な「漢字を読む力・書く力」を身につけ、自分の関心のある分野の語彙を増やす。週1コマ。『KANJI2200 日本語学習のためのよく使う漢字2200』(三省堂), 『語彙マップで覚える漢字と語彙 中級1500』(Jリサーチ出版)使用。
- ・応用会話：教室の外の様々な場面で、これまで勉強した or いま勉強している日本語を実際に使いながら、さらに応用できる力(表現力, 聞き取り力, 質問力など)を養う。週1コマ。自作教材使用。
- ・日本事情：これから日本で生活していく上で必要な文化的・社会的理解を深め、日本の社会や身の周りの環境に慣れる。週1コマ。自作教材使用。
- ・「留学生と日本」：外国人留学生と日本人学生が討論や共同作業を通じて、日本社会や日本文化に対する理解と相互の理解を深める。週1コマ。自作教材使用。
- ・物理・化学・数学：専門教育の土台となる基礎知識を確認するとともに、その知識を日本語と結び付ける。各週1コマ。自作教材使用。
- ・オンライン日本語：moodleを使用し、ウェブ上で日本語の学習を行う。読解・作文コースと漢字コースからなる。週2コマ。

#### (2) レポート作成と発表会

2月に入ってから、各自が選んだテーマに基づき資料を収集し、報告レポートを作成した。2月24日(水)には、工学部の担当教員・日本語教育担当教員・本

コースの先輩学生を招いて、レポート発表会を行った。テーマは、「北欧デザイン」「半導体」「言語習得の方法」「ドローンについての科学的分析と人間生活に及ぼす影響」「ヴァンデグラフ起電機の原理と活用例」「良い音響機器と室内音響」「露出コンクリート」であった。

### (3) 評価

10月5日(月)に日本語診断テスト(聴解, 漢字, 文法・表現, 読解から構成)を行い, 各科目の内容や進捗を検討した。コース内の評価として, 会話・聴解・文法の各クラスでは, 3課進むごとに筆記試験を行った。会話に関しては, シャドーイングとロールプレイの口頭試験もこれと合わせて実施した。2月25日(木)には修了試験を行った。これは, 診断テストと同レベルの試験で, コースを通しての日本語能力の伸びを測った。

### 3. 今期の特徴と今後の課題

今期の特徴としては, 以下の2点が挙げられる。

- ・来日時の学生の日本語力が従来に比べてかなり高かった。既にN1合格の学生もいたため, 現行の教材のレベルはやや易しめと感じられたかもしれない。もともとのレベルの高さが影響したのか, 修了試験では, 診断テストとはほぼ同様の結果となった。ただ, コースを通じて, 会話や作文などの産出面では, 流暢さ・産出量ともに向上が観察された。
- ・会話のクラスでシャドーイングを組織的に行うようにした。効果についてはよくわからないが, 学生は真剣に取り組んでおり, 練習のバリエーションの増加の面で意義はあった。

今後の課題としては, 学生の日本語力の高まりへの対応が挙げられる。来期は, 韓国での予備教育の充実により, さらに高いレベルの日本語力を持つ学生が来日する予定である。カリキュラムの大幅な変更も視野に入れていく必要がある。

## 日本語教育メディア・システムの開発

石崎 俊子 ・ 佐藤 弘毅

2015年度に以下の活動を行った。

1. 名古屋大学中級コース I MP3 Sound の公開
2. オンライン日本語コースの運営

### 1. 名古屋大学中級コース I MP3 Sound の公開

The screenshot shows the website for the Nagoya University International Language Center, Japanese Language and Culture Education Department. The main banner features the title '現代日本語コース中級 聴解' (Intermediate Japanese Listening Course) with a CD image. Below the banner, a 'What's New' section highlights '全学日本語プログラム' and '名古屋大学中級コース I MP3 Sound'. The 'Japanese Online Materials' section lists various resources, with '名古屋大学中級コース I MP3 Sound' highlighted by a red arrow.

名古屋大学国際言語センター  
日本語・日本文化教育部門

サイトマップ アクセス English 検索

トップページ 紹介 日本語プログラム 日本語オンライン教材

現代日本語コース中級 聴解  
Intermediate Japanese Listening Course

What's New > 全学日本語プログラム 名古屋大学中級コース I MP3 Sound

紹介  
ミッション  
教員紹介  
公募情報  
研究・教育業績  
出版物  
アクセス・連絡先

日本語プログラム  
概要  
全学日本語プログラム  
特別日本語プログラム  
日本語教育関連図書

日本語オンライン教材  
現代日本語コース中級聴解  
WebCMJ  
オンライン日本語コース(Moodle)  
とよた日本語eラーニング(TNe)  
A Course in Modern Japanese I & II  
名古屋大学中級コース I  
名古屋大学中級コース I MP3 Sound  
名古屋大学中級コース II  
留学生のための専門講義の日本語  
その他のおすすめ教材

名古屋大学国際言語センター  
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 [地図]  
電話 052-789-2198 FAX 052-789-5100

30 NAGOYA UNIVERSITY  
GLOBAL 30  
INTERNATIONAL PROGRAMS

名古屋大学 国際教育交流本部 とよた日本語学習支援システム

中級の日本語のコースで使用されている現代日本語コース中級Ⅰの改訂に伴い、今まで付属していたCDを廃止することにした。その背景としては近年CDを再生する機器を学生が持ち合わせていない、又、MP3でダウンロードしたいという要望が多かったためである。従来のCDではすべての音が通し番号で収められていたが、新しいダウンロードMP3バージョンでは各レッスンごとにフォルダーに分けてあり、その中で更に文法、談話、会話、用法のカテゴリごとにフォルダーに分類してある。このように分類することによって聞ききたい音声が見つけれられ、学習者の勉強意欲の向上につながると確信する。アクセス方法も日本語・日本文化教育部門のトップページのメニューからすぐにできるように工夫した。(図中の矢印の所)

## 2. オンライン日本語コースの運営

今年度のオンラインコースの履修状況は以下の通りであった。登録者数は履修登録を行った人の数を、受講者数は一度でもオンラインコースにアクセスした人の数を、修了者数は各コースの修了要件を満たした人の数である。

### 【オンライン読解・作文コース】

前期	登録者数：16	後期	登録者数：43
	受講者数：2		受講者数：8
	修了者数：1		修了者数：3

2015年度オンライン読解・作文コースの修了者数(14課中10課以上60%以上の成績)は前期1名、後期3名であった。

### 【オンライン漢字コース】

前期	登録者数：25	後期	登録者数：22
	受講者数：9		受講者数：9
	修了者数：4		修了者数：2

2015年度オンライン漢字コースの修了者数(10課中80%以上の成績)は前期4名、後期2名であった

各期各コース共に20数名の履修登録者がおり、コースに対するニーズは高いことが伺える。一方で登録はしたものの実際にオンラインコースにアクセスする人は半数にも満たない少なさで、さらに継続的に課題をこなし修了する人はごくわずかであるという傾向が、ここ数年続いている。これは、研究などの活動を続けながら各自のペースで日本語を勉強するためにオンラインコースを受講登録したものの、実際には忙しくてなかなかコースにアクセスする時間が取れないものと推察される。各コースでオフィスアワーを設け、電子メールによるキューイング(アクセスを促す連絡)を積極的に行っているが、今後もこのように受講者になるべく自分のペースで学習できる環境を整えていきたい。



## G30国際プログラム（学部）における日本語科目

### 2015年度報告

初鹿野 阿れ ・ 徳 弘 康 代

#### 1. 国際プログラム（学部）における日本語科目

2011年秋学期に始まったG30国際プログラム(学部)は、2015年9月に初めての卒業生を出した。進路は様々であるが、名古屋大学の大学院に進学する学生や日本で就職する学生が数名いたことは、日本語を担当する者としてうれしいことであった。

2015年、秋に入学した学生は52名で、そのうち48名が必修日本語科目（「総合日本語・日本語セミナー（コミュニケーション）」または、「アカデミック日本語」「ビジネス日本語」）を履修している。

本年度、国際プログラム（学部）において開講された科目は以下の通りである。2015年春より、「アカデミック日本語（文章理解・文章表現）」5が開講されている。「アカデミック日本語」と「ビジネス日本語」は、日本語を既習で来日した1年生と、1年で必修日本語を履修した2、3年生が受講している。秋学期からは、大学院に進学したG30の学生も、G30日本語クラスや全学日本語プログラムに参加し、日本語を学習している。

〈秋学期〉（2015年10月～2016年3月）：

- ・総合日本語 1a・1b
- ・日本語セミナー（コミュニケーション） 1a・1b
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現） 1
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現） 3
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現） 5
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現） 1
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現） 3
- ・ビジネス日本語 1
- ・ビジネス日本語 3

〈春学期〉（2015年4月～2015年9月）：

- ・総合日本語 2a・2b
- ・日本語セミナー（コミュニケーション） 2a・2b

- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現） 2
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現） 4
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現） 5
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現） 2
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現） 4
- ・ビジネス日本語 2
- ・ビジネス日本語 4

#### 2. その他の活動

2016年2月、名大基金感謝の集いにおけるG30奨学生のスピーチの指導を行った。また、2016年2月4日～18日に行われた名古屋大学短期日本語プログラム（NUSTEP）の日本語科目コーディネートの支援も行った。



[平成27年度名古屋大学基金感謝の集い]

# 資 料

---

歴代センター長

平成27年度 国際言語センターの専任教員

平成27年度 日本語コースの担当者

平成27年度 大学院・学部授業担当および学位審査論文

国際言語センター教員研究業績

国際言語センター主催研究会記録

国際言語センター全学委員会委員

国際言語センター沿革



## 歴代センター長

### 留学生センター

初代	馬越 徹	1993年4月～1995年3月
第二代	石田 眞	1995年4月～1999年3月
第三代	塚越 規弘	1999年4月～2001年3月
第四代	末松 良一	2001年4月～2005年3月
第五代	江崎 光男	2005年4月～2007年3月
第六代	石田 幸男	2007年4月～2011年3月
第七代	町田 健	2011年4月～2013年9月

### 国際言語センター

初代	福田 眞人	2013年10月～
----	-------	-----------

## 平成27年度 国際言語センターの専任教員

センター長 福田 眞人 (2013年10月～)

### 日本語・日本文化教育部門

教授	鹿島 央
教授	棚山 洋介
教授	浮葉 正親
教授	衣川 隆生
准教授	石崎 俊子
准教授	李 澤熊
准教授	佐藤 弘毅
准教授	俵山 雄司
特任准教授	初鹿野阿れ (2016年2月より国際教育交流センターへ配置換え)
特任准教授	徳弘 康代 (2016年2月より国際教育交流センターへ配置換え)

### 英語教育部門

特任教授	FISCHER Berthold (兼任)
特任教授	BUTKO Peter (兼任)
特任准教授	WOJDYLO John Andrew (兼任)
特任准教授	VASSILEVA Maria Nikolaeva (兼任)

## 平成27年度 日本語コースの担当者

### 1. 日本語研修 コース

#### 〈4月期：第72期〉

衣川 隆生	高橋 伸子
鹿島 央	坪田 雅子
佐藤 弘毅	安井 澄江
魚住 友子	松木 玲子
大羽かおり	久野伊津子

#### 〈10月期：第73期〉

衣川 隆生	高橋 伸子
鹿島 央	坪田 雅子
佐藤 弘毅	安井 澄江
魚住 友子	松木 玲子
大羽かおり	久野伊津子

### 2. 日本語・日本文化研修コース

#### 〈2014年10月～2015年9月：第34期〉

榊山 洋介	向井 淑子
中川 康子	松岡みゆき
西田 瑞生	加藤 惠梨

### 3. 教養科目「留学生と日本 —異文化を通しての日本理解」

渡部 留美	浮葉 正親
高木ひとみ	中島美奈子

### 4. 全学向け日本語コース

#### 〈前期〉

李 澤熊	坪田 雅子
浮葉 正親	西田 瑞生
石崎 俊子	安井 澄江
鹿島 央	魚住 友子
榊山 洋介	大羽かおり
佐藤 弘毅	服部 淳
衣川 隆生	松木 玲子
俵山 雄司	加藤 惠梨
徳弘 康代	中川 康子
石川 公子	向井 淑子
久野伊津子	加藤 淳
宗林 由佳	安井 朱美
高橋 伸子	國澤 里美
高安 葉子	田中 典子
嶽 逸子	金 敬黙
椿由 起子	

#### 〈後期〉

李 澤熊	椿由 起子
浮葉 正親	坪田 雅子
石崎 俊子	西田 瑞生
鹿島 央	安井 澄江
榊山 洋介	魚住 友子
佐藤 弘毅	大羽かおり
衣川 隆生	服部 淳
俵山 雄司	松木 玲子
徳弘 康代	中川 康子
石川 公子	向井 淑子
久野伊津子	加藤 淳
宗林 由佳	安井 朱美
高橋 伸子	國澤 里美
高安 葉子	田中 典子
嶽 逸子	金 敬黙

5. 学部留学生を対象とする言語文化科目  
〈日本語〉

〈前期〉

浮葉 正親	鷺見 幸美
俵山 雄司	西田 瑞生
魚住 友子	國澤 里美

〈後期〉

浮葉 正親	鷺見 幸美
俵山 雄司	西田 瑞生
魚住 友子	國澤 里美

6. 日韓理工系学部留学生日本語プログラム

〈2015年10月～2016年3月〉

俵山 雄司	近藤 行人
李 澤熊	西坂 祥平
石崎 俊子	梶原 彩子
千葉 月香	佐藤 弘毅
ソル ヘソン	木村あずさ

7. G30国際プログラム（日本語科目）

初鹿野阿れ	加藤 淳
徳弘 康代	安井 朱美

## 平成27年度 授業担当および学位論文審査

### I. 授業担当 (大学院・教養教育院・NUPACE)

#### 1. 大学院

##### 国際言語文化研究科

鹿島 央：日本語音声学 a (前期1コマ 2単位)

日本語音声学 b (後期1コマ 2単位)

榎山洋介：現代日本語学概論 a (前期1コマ 2単位)

現代日本語学概論 b (後期1コマ 2単位)

李 澤熊：日本語文法論 a (前期1コマ 2単位)

日本語文法論 b (後期1コマ 2単位)

衣川隆生：日本語教育方法論概説 a  
(前期1コマ 2単位)

日本語教育方法論概説 b  
(後期1コマ 2単位)

石崎俊子：コンピューター支援日本語教育方法論 a  
(前期1コマ 2単位)

コンピューター支援日本語教育方法論 b  
(後期1コマ 2単位)

佐藤弘毅：日本語教育工学 a (前期1コマ 2単位)

日本語教育工学 b (前期1コマ 2単位)

俵山雄司：談話分析方法論 a (前期1コマ 2単位)

談話分析方法論 b (後期1コマ 2単位)

浮葉正親：日韓比較文化論 a (前期1コマ 2単位)

日韓比較文化論 b (後期1コマ 2単位)

##### 文学研究科

榎山洋介：理論言語学 a (前期1コマ 2単位)

理論言語学 b (後期1コマ 2単位)

#### 2. 教養教育院

浮葉正親：基礎セミナー A「韓流ドラマから『パッチギ』まで一日韓比較文化論のすすめ」

(前期1コマ 2単位)

浮葉正親・渡部留美・高木ひとみ・中島美奈子  
：全学教養科目「留学生と日本-異文化を通しての日本理解」 (後期1コマ 2単位)

佐藤弘毅：全学教養科目「情報リテラシー (文系)」  
(前期1コマ 2単位)

俵山雄司：全学基礎科目「言語文化I日本語1」  
(前期1コマ 1.5単位)

俵山雄司：全学基礎科目「言語文化I日本語2」  
(後期1コマ 1.5単位)

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化I日本語1」  
(前期1コマ 1.5単位)

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化I日本語1」  
(後期1コマ 1.5単位)

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化II日本語1」  
(前期1コマ 2単位)

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化II日本語2」  
(後期1コマ 2単位)

徳弘康代：Integrated Japanese 1  
(後期3コマ 3単位)

徳弘康代：Integrated Japanese 2  
(前期3コマ 3単位)

徳弘康代：Japanese Language Seminar  
(Communication) 1 (後期2コマ 3単位)

徳弘康代：Japanese Language Seminar  
(Communication) 2 (前期2コマ 3単位)

徳弘康代：Academic Japanese (Reading & Writing) 1  
(後期1コマ 1.5単位)

徳弘康代：Academic Japanese (Reading & Writing) 2  
(前期1コマ 1.5単位)

徳弘康代：Academic Japanese (Reading & Writing) 5  
(前期1コマ 1.5単位, 後期1コマ1.5単位)

初鹿野阿れ：Integrated Japanese 1  
(後期3コマ 3単位)

初鹿野阿れ：Integrated Japanese 2  
(前期3コマ 3単位)

初鹿野阿れ：Japanese Language Seminar  
(Communication) 1

(後期2コマ 3単位)

初鹿野阿れ：Japanese Language Seminar

(Communication) 2  
 (前期 2 コマ 3 単位)  
 初鹿野阿れ: Academic Japanese (Listening &  
 Presentation) 1 (後期 1 コマ 1.5 単位)  
 初鹿野阿れ: Academic Japanese (Listening &  
 Presentation) 2 (前期 1 コマ 1.5 単位)

### 3. 名古屋大学短期交換留学プログラム (NUPACE)

初山洋介: 入門講義「言語学 1」  
 (後期 1 コマ 2 単位)  
 初山洋介: 入門講義「言語学 2」  
 (前期 1 コマ 2 単位)  
 浮葉正親: 入門講義「日本文化論 1」  
 (後期 1 コマ 2 単位)

浮葉正親: 入門講義「日本文化論 2」  
 (前期 1 コマ 2 単位)  
 李 澤熊: 入門講義「日本語学 1」  
 (後期 1 コマ 2 単位)  
 李 澤熊: 入門講義「日本語学 2」  
 (前期 1 コマ 2 単位)  
 徳弘康代: 入門講義「日本文学 1」  
 (後期 1 コマ 2 単位)  
 徳弘康代: 入門講義「日本文学 2」  
 (前期 1 コマ 2 単位)  
 金 敬黙 (非常勤講師): 入門講義「国際関係論 1」  
 (後期 1 コマ 2 単位)  
 金 敬黙 (非常勤講師): 入門講義「国際関係論 2」  
 (前期 1 コマ 2 単位)

## II. 学位 (博士) 論文審査

- 鹿島 央 (主査) 論文提出者: 曹秀弦 (国際言語文化研究科)  
 提出論文: 韓国人学習者による日本語破裂音・破擦音・摩擦音の長さの音声的実現について  
 が日本語アクセント知覚に与える影響について
- 李 澤熊 (主査) 論文提出者: 金奈淑 (国際言語文化研究科)  
 提出論文: 数量が大であることを表す不特定数量詞の意味分析
- 鹿島 央 (副査) 論文提出者: 金奈淑 (国際言語文化研究科)  
 提出論文: 数量が大であることを表す不特定数量詞の意味分析
- 鹿島 央 (副査) 論文提出者: TABATA Megumi (国際言語文化研究科)  
 提出論文: The Relationships between Sound Sensitivity, English Prosody Processing, and English Listening comprehension
- 鹿島 央 (副査) 論文提出者: 梁 辰 (国際開発研究科)  
 提出論文: 日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者および非学習者の日本語アクセント知覚 — 日本語の学習経験
- 鹿島 央 (副査) 論文提出者: 蘇迪亜 (国際開発研究科)  
 提出論文: 中国語・モンゴル語を母語とする日本語学習者における日本語母音無声化に関する研究
- 初山洋介 (副査) 論文提出者: 呉守鎮 (国際言語文化研究科)  
 提出論文: 韓国語の文末名詞化構文・連体終止形に関する認知類型論的研究 — 日本語との対比を通じて
- 初山洋介 (副査) 論文提出者: 金奈淑 (国際言語文化研究科)  
 提出論文: 数量が大であることを表す不特定数量詞の意味分析
- 衣川隆生 (副査) 論文提出者: 勝田順子 (国際言語文化研究科)  
 提出論文: マレーシア語と日本語の対照会話研究 — あいづちとその出現環境を中心に
- 俵山雄司 (副査) 論文提出者: 金奈淑 (国際言語文化研究科)  
 提出論文: 数量が大であることを表す不特定数量詞の意味分析



○俵山雄司（副査）

論文提出者：MIFTACHUL AMRI（愛知学院大学  
文学研究科）

提出論文：インドネシア語・日本語ビジネス電子  
メールについて―「敬称」「前文」「主  
文」「末文」の研究―

○初鹿野阿れ（副査）

論文提出者：勝田順子（国際言語文化研究科）

提出論文：マレーシア語と日本語の対照会話研  
究―あいづちとその出現環境を中心  
に―

## 平成26年度 国際言語センター教員研究業績

### (1) 李澤熊

#### 論文

- 1) 李澤熊 (2015) 「動詞『おす』の意味分析－日本語教育の観点から－」『言語文化論集』第37巻1号, pp.3-14, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.
- 2) 李澤熊 (2016) 「動詞『つくる』の意味分析」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第23号, pp.75-99, 名古屋大学国際言語センター.

#### 口頭発表

- 1) 李澤熊 (2015) 「日本語と韓国語の類義語分析－「ゆとり：余裕」「うら：うしろ」「바르다 (bareuda) : 옳다 (olta)」』現代日本語学研究会 (第151回), 4月, 於名古屋大学
- 2) 李澤熊 (2015) 「日韓対照言語研－多義的別義の認定をめぐる－」現代日本語学研究会 (第154回), 8月, 於名古屋大学
- 3) 李澤熊 (2015) 「日韓対照言語研－多義的別義の認定をめぐる－」日本認知言語学会第16回記念大会, 9月, 於同志社大学
- 4) 李澤熊 (2015) 「動詞『つくる』の意味分析－日本語教育の観点から－」韓国日本語学会第32回国際学術発表大会, 9月, 於韓国通信放送大学校

#### その他

- 1) 2015年9月「返す」『基本動詞ハンドブック』, 述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 プロジェクト, 国立国語研究所 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>)
- 2) 2016年3月「決める」『基本動詞ハンドブック』, 述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 プロジェクト, 国立国語研究所 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>)
- 3) 2016年3月「決まる」『基本動詞ハンドブック』, 述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 プロジェクト, 国立国語研究所 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>)

### (2) 石崎俊子

#### 論文

- 1) 石崎俊子 (2015) 文化理解を目的としたコンピュータ教材の活用の分析」『Computer Assisted Systems for Teaching & Learning Japanese (CASTEL/J)』 pp. 123-126

#### 発表

- 1) 石崎俊子 (2015) 「オンライン日本語学習の学習実態調査」日本語教育学会研究集会, pp.20-23, 於名古屋大学

### (3) 浮葉正親

#### 論文

- 1) 浮葉正親 (2016) 「韓国における巫俗研究の進展と洪泰漢氏の研究」『比較日本文化研究』第18号, 比較日本文化研究会, 85-89頁

#### 翻訳

- 1) 洪泰漢 (2016) 「巫儀 (ムーダン・クツ) の祝祭としての可能性」『比較日本文化研究』第18号, 比較日本文化研究会, 66-84頁 (原文・韓国語)

#### 発表

- 1) 浮葉正親 (2015) 「民俗芸能の保存と継承および観光資源としての活用－日本の場合」第18回晋州仮面劇フェスティバル学術シンポジウム, 韓国・慶尚大学校, 2015年5月22日 (韓国語)
- 2) 浮葉正親 (2015) 「ソウルの村祭り－三角山都堂クツを中心に」日本民俗学会第67回年会, 関西学院大学, 2015年10月11日
- 3) 浮葉正親 (2015) 「磯貝治良の中期作品における在日朝鮮人像の形成－少年時代の「朝鮮体験」を生き直す」韓国日本言語文化学会2015年度秋季国際学術大会, 韓国・高麗大学校, 2015年11月7日

#### (4) 鹿島 央

論文

- 1) 鹿島 央・橋本慎吾 (2015) 「キャリア文中における語の持続時間と呼気流量との関係について—日本語母語話者と米語話者の日本語との比較を通して—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第23号 pp.9-35, 名古屋大学国際言語センター

発表

- 1) 鹿島 央・橋本慎吾  
「キャリア文中における語の持続時間と呼気流量について—日本語母語話者と米語話者の日本語との比較を通して—」日本音声学会第332回音声学会研究会, 法政大学, 2014年12月

#### (5) 衣川隆生

論文

- 1) 衣川隆生, 田中典子, 内山喜代成, 近藤行人, 松尾憲暁 (2016) 「アカデミックリテラシー育成を目的とした教材の開発」『日本語教育方法研究会誌』22, 3, pp.94-95.
- 2) 衣川隆生, 伊東美穂, 田中千恵 (2015) 「対話と説明によるテキスト解釈の変容過程の分析? 中上級日本語学習者を対象とした読解授業において?」『名古屋大学日本語・日本文化論集』23, pp.101-130.
- 3) 西坂祥平, 近藤行人, 衣川隆生 (2015) 「他者に説明する活動を通じた専門講義理解支援の取り組み「日韓プログラム」に在籍する留学生に対する実践事例」『専門日本語教育研究』17, pp.23-28.
- 4) 伊東美穂, 田中千恵, 衣川隆生 (2015) 「協働活動におけるグループ間の相互行為の特徴の差が理解の深化に与える影響: 中上級日本語学習者を対象とした読解授業」『日本語教育方法研究会誌』22, 2, pp.30-31.
- 5) 齊藤 聖菜, 衣川 隆生 (2015) 「日本語口頭発表の実践におけるピア・フィードバックの構成要素と構造」『日本語教育方法研究会誌』22, 2, pp.54-55.

#### (6) 佐藤弘毅

著書

- 1) Kitazawa, T., Sato, K., Akahori, K., (2016) The Effect of Question Styles and Methods in Quizzes Using Mobile Devices, *Advances in Intelligent*

*Systems and Computing*, Vol. 406, pp.1-22

発表

- 1) 佐藤弘毅 (2015) 「受講者のコメントをリアルタイムに収集・共有する効果に関する分析—ツールに対する受講者の印象評価に基づくタイプ別の分析—」『教育システム情報学会研究報告』Vol.30, No.5, pp.59-66

#### (7) 俵山雄司

著書

- 1) 俵山雄司 (2015) 「談話終結部における文のタイプ」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 (編) 『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版, pp.265-283
- 2) 俵山雄司 (2016) 「講義における一般語の語義説明に対する日本語学習者の評価—理工系専門講義における「わかりやすい日本語」を探る—」宇佐美洋 (編) 『「評価」を持って街に出よう 「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』くろしお出版, pp.305-319

論文

- 1) 俵山雄司・渡部真由美・結城恵 (2016) 「地域日本語教育における各分野の専門家と日本語教師との協働—外国人生活者向けケアプラン日本語教室の企画・教材作成・実施を例に—」『群馬大学国際教育・研究センター論集15』, pp.35-48

ワークショップ

- 1) 俵山雄司・山口昌也・金田智子・森篤嗣 (2016) 「授業を評価する: Fish Watchr による評価の集約と可視化」『「評価」を持って街に出よう』出版記念シンポジウム, 2016年1月10日, 東京大学駒場キャンパス
- 2) 森篤嗣・山口雅也・柳田直美・俵山雄司 (2016) 「話し合いを評価する: Fish Watchr による評価の集約と可視化」『「評価」を持って街に出よう』出版記念シンポジウム, 2016年1月10日, 東京大学駒場キャンパス

## (8) 徳弘康代

### 論文

- 1) 徳弘康代 (2015) 「日本語教育における漢字教育—研究と実践—」『日本語学 2015年4月臨時増刊号 特集漢字の指導法』 pp.126-137, 明治書院
- 2) 徳弘康代 (2015) 「漢字の汎用性調査」『日本語教育における日中対照研究・漢字教育研究』 pp.517-532, 駿河台出版社
- 3) 徳弘康代 (2016) 「語彙マップを用いた初級漢字語彙教材の開発」『JSL 漢字学習研究会誌』第8号 15-19, JSL 漢字学習研究会

### 発表

- 1) 徳弘康代 (2015.8) 「言語の枠を超えた外国語としての漢字教育の研究と連携」第四回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム, 於 中国・延吉, 延辺大学
- 2) 徳弘康代 (2015.8) 「ことばの表出を促す初級語彙マップ教材の開発」The 19th European Symposium on Japanese Language Education, 於 フランス・ボルドー, モンテーニュ大学
- 3) 徳弘康代 (2016.2) 「漢字語彙のモーラ音素の有無による類音語の調査とその資料の作成」第59回 JSL 漢字学習研究会, 於 早稲田大学
- 4) 徳弘康代 (2016.3) 「「~国人」ではなくひとりの「人」として世界にあるという視野を身につける」大学教育改革フォーラム in 東海2016, 於 愛知大学

## (9) 初鹿野阿れ

### 論文

初鹿野阿れ・岩田夏穂 「やり取りにおける問題解決に焦点を当てた会話教材開発」, 『ヨーロッパ日本語教育20: 2015第19回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウム報告・発表論文集』, ヨーロッパ日本語教師会

### 発表

初鹿野阿れ・岩田夏穂 「やり取りにおける問題解決に焦点を当てた会話教材開発」第19回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウム 2015年8月26日, ボルドーモンテーニュ大学, フランス

## (10) 初山洋介

### 編書

- 1) 山梨正明・吉村公宏・堀江薫・初山洋介[編] (2015) 『認知類型論』(認知日本語学講座 第6巻), くろしお出版

### 論文

- 1) 初山洋介 (2016) 「形容詞『かたい』の意味—メトニミーとフレームの観点から—」, 『言語文化論集』37-2, pp.73-87, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

### 研究発表

- 1) 初山洋介 (2015) 「百科事典的意味観から見た日本語」(招待講演), 関西言語学会 (第40回記念大会), 2015年6月14日, 於神戸大学
- 2) 初山洋介 (2015) 「多義語の多様性: 典型的な多義語と単義語寄りの多義語」(ワークショップ「多義語への多角的アプローチ」[代表: 李澤熊]), 『日本認知言語学会 第16回 CONFERENCE HANDBOOK』, pp.2-5, 日本認知言語学会, 2015年9月12日, 於同志社大学

### その他

- 1) 初山洋介 (2015) 「成蹊大学共同研究プロジェクト: 認知言語学の新領域開拓研究/ゲストコメンテーター」, 2015年12月20日, 於成蹊大学
- 2) 初山洋介 (2016) 『基本動詞ハンドブック』WEB版 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>), 国立国語研究所・共同プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 (基本動詞ハンドブック作成チーム)」[校閲担当語「あたる」「あてる」「ひく」「おす」「いる」「考える」「思う」「ふれる」「あう」「うつ」「かえす」「ぬく」]

## 平成26年度 国際言語センター研究会記録

### 教員による研究会

#### (1) 現代日本語学研究会

(関係教員：初山洋介／李澤熊)

「現代日本語学研究会」は、初山洋介を世話人として、1994年3月に始まったものである。また、2003年4月より、李澤熊が事務局を担当し、研究会の運営に尽力している。研究会は2016年3月現在で158回開催されている。参加者は毎回15～30人程度である。

本研究会は現代日本語を研究対象とし（日本語と他言語との対照研究を含む）、「意味論」「文法論」「語用論」等の分野で研究を行っている研究者（教員、大学院生等）の集まりである。ただし、参加者の研究の枠組みは多岐にわたり、理論志向の研究者も記述志向の研究者もいる。また、認知言語学を専攻する者も生成文法の研究者もいる。参加資格は、原則として、(近い将来)研究発表が可能な者とし、研究の水準は修士論文以上を目安としているが、学部レベルの参加者もいる。

2015年度に開催された研究会は以下の通りである。

第151回：2015年4月25日

発表者：李澤熊（名古屋大学）

発表題目：日本語と韓国語の類義語分析－「ゆとり：余裕」「うしろ：うら」「바르다 (bareuda) : 옳다 (olta)」－

第152回：2015年5月30日

発表者：初山洋介（名古屋大学）

発表題目：百科事典の意味観から見た日本語

第153回：2015年6月27日

発表者：大西美穂（名古屋短期大学）

発表題目：属性の知覚と談話の階層についての予備的分析

第154回：2015年8月8日

午前の部

発表題目：「多義語への多角的アプローチ」

第1発表：初山洋介（名古屋大学）

第2発表：李澤熊（名古屋大学）

第3発表：木下りか（武庫川女子大学）

第4発表：有蘭智美（名古屋学院大学）

午後の部

第5発表：渡邊 真（名古屋大学【院】）

発表題目：「はい」と「いや」の一考察－応答用法の典型例と周辺例の連続性－

第6発表：木村あずさ（名古屋大学【院】）

発表題目：「未遂を表す後項動詞の意味分析－「～そこなう」, 「～そびれる」を中心に－

第7発表：山本幸一（名古屋外国語大学【非】）

発表題目：「完了形の共通スキーマと3用法の意味」

第155回：2015年10月31日

発表者：栗木久美（名古屋大学【院】）

発表題目：多義語としての形容詞「深い」の意味分析

第156回：2015年12月12日

発表者：野呂健一（高田短期大学）

発表題目：現代日本語の依頼表現における「いただく」使用の広がりとその要因

第157回：2016年2月27日

発表者：大西美穂（名古屋短期大学）

発表題目：文末名詞としての「勢い」

第158回：2016年3月19日

発表者：金奈淑（名古屋韓国学校）

発表題目：数量が大であることを表す不特定数量詞の意味分析

#### (2) 名古屋音声研究会（関係教員：鹿島 央）

本研究会は、音声学を専攻する学生あるいは音声に興味を持っている学生がそれぞれの抱える問題を共有する場として2004年5月にスタートした。前期は5月から7月まで、後期は10月から1月まで、毎週金曜日の夕方5時から開催している。以下は、2015(平成27)年度の発表者の名前とタイトルである。

2015年度（前期）

4月17日（金）

英語学習者の聴解時の Late closure・Early closure の処理における韻律情報の影響（後藤亜紀）

5月8日（金）

高さ（F0）、長さ、速さと発話意図に関するパラ言語習得（福岡昌子）

5月15日（金）

韓国人学習者による日本語破裂音の音声的な長さの実現について—要因別分析と考察を中心に—（曹秀弦）

5月22日（金）

リズム導入のための視聴覚教材の開発（吉田千寿子）

5月29日（金）

日本語を母語とする韓国語学習者による韓国語感情音声の知覚（佐々木蘭亜）

6月5日（金）

インドネシア人日本語学習者による日本語摩擦子音の聴覚的な混同の要因：四者択一定課題（ヘニ・ヘルナワティ）

6月12日（金）ベンガル語母語話者の日本語生成における音声的特徴（近藤三紀子）

6月19日（金）

モンゴル語を母語とする日本語学習者における日本語の母音無声化について（蘇迪亜）

6月26日（金）

延辺朝鮮語話者の日本語アクセント習得における母語の影響（盧振宇）

7月3日（金）

日本人英語学習者の英語発話におけるリズムについて—リズムの測定の指標である PVI を用いて—（本山潤）

7月10日（金）

ベトナム語を母語とする日本語学習者の促音の知覚と生成について—音節末閉鎖音とフォルマント遷移に焦点をあてて—（久野百代）

7月17日（金）

日本語の句を構成する語のアクセント型の配列による発音の難易について—中国語を母語とする日本語学習者の場合—（梁辰）

7月24日（金）

中国語湘方言の[n]と[l]の発音傾向について（蔣媛）

7月31日（金）

英語学習者の聴覚的な語彙処理における語強勢の典型性効果—先行研究の考察と実験計画—（天野修一）

2015年度（後期）

10月16日（金）

音声導入のための視聴覚教材の開発と実践（吉田千寿子）

10月23日（金）

中国語を母語とする日本語学習者における日本語の母音無声化に関わる要因について（ス ディア）

10月30日（金）

英語学習者の聴解時の文処理における韻律情報の利用の解明（後藤亜紀）

11月6日（金）

ベトナム語を母語とする日本語学習者の促音の知覚と生成—フォルマント遷移に焦点をあてて—（久野百代）

11月13日（金）

リズム指標の妥当性及び信頼性についての検証—日本語母語話者の英語発話を例として—（本山潤）

11月20日（金）

ベンガル語母語話者の日本語生成における音声的特徴（近藤三紀子）

11月27日（金）

日本語母語話者による英語発話のリズム研究（本山潤）

12月4日（金）

学習者による日本語摩擦子音の生成の特徴①：印象評価による分析（ヘニ・ヘルナワティ）

12月11日（金）

韓国人学習者による日本語破裂音の長さの実現について—要因分析、聴覚評定、音響分析を中心に—（曹秀弦）

12月18日（金）

語の辞書検索過程における語彙的音調が果たす役割について—文献調査その1—（梁辰）

2016年

1月15日（金）

中国語湘方言（全州地域）の[n]と[l]の発音傾向について（蔣媛）

1月22日（金）

台湾華語の自然発話における音節末鼻音の合流現象に韻律と地域差の影響（The Effect of Prosody and Dialectal Difference on Syllable-final Nasal Mergers in Taiwan Mandarin Spontaneous Speech）（雷翔宇）



## 平成27年度 国際言語センター全学委員会委員

## 平成27年度 国際言語センター全学委員会委員

(平成27年4月～)

委員会名	委員	任期	期間
国際教育交流本部会議	センター長		3号委員
国際交流委員会	衣川 隆生	2年	
国際教育運営委員会	初鹿野 阿れ 徳弘 康代		(オブザーバ) (オブザーバ)
交換留学実施委員会	衣川 隆生		5号委員
研究助成委員会	石崎 俊子	2年	平成26年4月1日～平成28年3月31日
全学教育企画委員会	浮葉 正親	2年	平成26年4月1日～平成28年3月31日
オープンコースウェア (OCW) 運営協議会運営委員	石崎 俊子	2年	平成26年4月1日～平成28年3月31日
附属図書館商議委員会 オブザーバー	浮葉 正親	2年	平成26年4月1日～平成28年3月31日
情報セキュリティ組織連絡協議会	佐藤 弘毅		
全学同窓会幹事会	李 澤熊		
こすもす保育園運営協議会	石崎 俊子	2年	平成26年4月1日～平成28年3月31日
災害対策室会議	衣川 隆生		平成25年4月1日～平成26年3月31日
全学計画・評価担当者会議	鹿島 央		(留学生センター)
教養教育院統括部 言語文化科目部会	浮葉 正親	1年	平成25年4月1日～平成26年3月31日
名古屋大学スペース・コラボレーション・システム事業委員会 全学教育棟子局運営委員会	佐藤 弘毅	1年	平成25年4月1日～平成26年3月31日

## 平成27年度 国際言語センター内部委員会委員

委員会名	下位部会・WG	メンバー
総務委員会	特昇 WG	衣川隆生
財務・施設委員会	経理・整備 WG	李 澤熊・佐藤弘毅
	情報セキュリティ WG	佐藤弘毅
	安全・防災部会	衣川隆生・鹿島 央・石崎俊子
広報委員会	広報・紀要部会	浮葉正親・李 澤熊・佐藤弘毅
	ホームページ部会	石崎俊子
	日本語・日本文化論集編集部会	榎山洋介・浮葉正親



## 国際言語センター沿革

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
1977	語学センターが非常勤講師による外国人留学生のための日本語教育を開始	
1978	専任講師着任, 「全学向け日本語講座」授業開始	
1979	語学センターと教養外国語系列が総合され, 総合言語センター発足 総合言語センターの1部門として「日本語学科」設置 「日本語研修コース」開講	
1981	「日本語・日本文化研修コース」開講	
1984	教養部在籍留学生対象一般教育外国語科目「日本語」開講	
1991	総合言語センターが言語文化部に改組。それに伴い一般教育外国語科目「日本語」は言語文化科目「日本語」として開講される	
1993. 4	学内共同教育研究施設として, 「留学生センター」設置 (「日本語・日本文化教育部門」・「指導相談部門」の2部門体制) 留学生センターとして, これまで通り「全学向け日本語講座」「日本語研修コース」「日本語・日本文化研修コース」言語文化科目「日本語」を開講	
1994. 4	留学生センター研修生規定が定められ, (1994.2), 研修生の受け入れ開始	
1996. 4	短期留学生対象日本語授業開始	
1998. 4	インターネットによる WebCMJ のオンライン開始	
1999. 4		「日本語教育メディア・システム開発部門」発足 (留学生センター4部門体制となる)
8		担当助教授着任 (ハリソン)
2000. 4		二人目の担当助教授着任 (大野)
2001. 3	留学生センター新棟完成	
2003. 3	教授1名退任 (藤原)	
4	講師1名採用 (李)	
2004. 2		助教授1名転任 (ハリソン)
3	助教授1名退任 (神田)	
4		WebCMJ 多言語版開発 オンライン読解・作文コース開始
11		助教授1名採用 (石崎)
2005. 3		助教授1名転任 (大野)

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
4	日本語プログラムの再編成 1) 全学日本語プログラム(集中コース, 標準コース, 漢字コース, 入門講義, オンライン日本語コース) 2) 特別日本語プログラム(初級日本語特別プログラム, 上級日本語特別プログラム, 学部留学生向け日本語授業, 日韓理工系学部留学生プログラム)	教授1名日本語・日本文化教育部門から配置換え(村上) オンライン漢字コース開始
5	留学生センターホームページ改訂	
6	講師1名採用(佐藤)	
2006. 3	教授1名転任(尾崎)	
4	助教授1名採用(衣川)	現代日本語コース中級聴解 CD-ROM 開発
5	教授1名昇任(靱山)	
10		現代日本語コース中級聴解 Web 開発
2007. 2		現代日本語コース中級聴解 Web 課金開始
6	准教授1名昇任(李)	
2008. 3		JEMS オンライン日本語教育ポータルサイト開発
2009. 11	特任准教授1名着任(初鹿野: 国際交流協推進本部)	
2010. 2	特任准教授1名着任(徳弘: 国際交流協推進本部)	
2011. 3		TNe とよた日本語 e ラーニング会話編(市役所, 病院, 学校) 完成 TNe とよた日本語 e ラーニング文字編(ひらがな, カタカナ, 履歴書) 完成
2012. 3		WebCMJ 多言語版完成(17言語) 「名古屋大学日本語コース中級 I & II」オンライン及びデジタル版の開発 TNe とよた日本語 e ラーニング会話編 5 カ国版完成 TNe とよた日本語 e ラーニング文字編 5 カ国版完成
2013. 4	教授2名昇任(浮葉, 衣川)	
10	国際交流協力推進本部改編に伴い, 留学生センター日本語・日本文化教育部門及び日本語教育メディア・システム開発部門は, 「国際言語センター」に改組(「日本語・日本文化教育部門」・「英語教育部門」の2部門体制)。	
2014. 4	准教授1名昇任(佐藤)	
2015. 2	国際言語センターホームページ改訂	
3	教授1名定年退職(村上)	
4	准教授1名採用(俵山)	
2016. 2	G30日本語教育担当教員2名「国際教育交流センターへ配置換え」	
3	教授1名定年退職(鹿島)	

## 編集後記

早いもので、国際言語センターに改組されてから次の10月で3年を迎え、本年報も第3号を刊行するに至った。各日本語コースの取り組みやFD活動の報告など、今年度も本センターが設立以来着実に積み重ねてきた実践の数々を報告できたと自負している。しかし、ここにきて感じるのは、優れた実践を行うだけでなく、その成果を形にして残し外部にアピールすることの重要性とその難しさである。

私自身は、本センター（前身の留学生センター）に赴任してから10年が経った。当初は慣れない環境に戸惑うことも多かったが、良い学生と良い研究環境に恵まれ、最近には自由に授業実践や研究をさせてもらっている。しかし一方で、これらの成果を論文等の研究業績として形にすることの難しさを日々痛感している。本年報にも掲載されているが、同僚の先生方の優れた研究業績の数々を目の当たりにして、身が引き締まる思いである。

本年報が我々の実践の成果を理解していただく一助となれば幸いである。

(KS)

### 名古屋大学国際機構 国際言語センター年報 第3号

2016年8月31日 印刷・発行

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

編集者 名古屋大学国際機構  
国際言語センター

電話 (052) 789-2198

FAX 789-5100

印刷所 株式会社 荒川印刷  
名古屋市中区千代田2-16-38  
電話 (052) 262-1006

Nagoya University Institute of International Education & Exchange  
International Language Center  
Annual Report Vol. 3